日本醫史學雜誌

第 24 巻　第 3 号

昭和 53 年 7 月 30 日発行

原　著

「医の本質」と「医の倫理」史的考察 ……三木　栄…(209)
佐々木中沢と刺絡……山形　敞一…(214)
ニコラース・トゥルプ（I）……古川　明…(224)
記紀神話と医療（上）……新村　拓…(236)
本土に最初に麻酔を伝えた島津藩医伊佐敷道興について……松木　明知…(246)
「瘍医新書」の研究（4）……大鳥蘭三郎…(252)
宇田川榕菴の著書に見られるガス代謝の記載（II）……矢部　一郎…(258)

資　料

虞列伊氏解剖訓蒙図の洋印……大滝　紀雄…(273)

例会記事 ……(275)

雑　報 ……(280)

1411

通　巻　第 1410 号

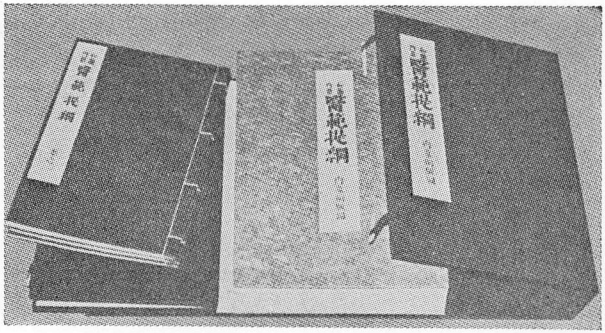
日　本　医　史　学　会

東京都文京区本郷 2-1-1
順天堂大学医学部医史学研究室内
振替口座・東京 15250 番
電話 03 (813) 3111　内線 544

和蘭内景 医範提綱
和蘭内景 医範提綱 内象銅版図

全三巻
全一冊

限定版 三〇〇部
頒価三八、〇〇〇円



●解説

順天堂大学教授　小川鼎三

宇田川玄真（一七六九～一八三四）の著「和蘭内景医範提綱」は文化二年（一八〇五）の出版で、十九世紀の前半、西洋医学に志をもつ日本人が、おそらく誰でもがまず繙いた一書であったとおもう。解剖学を主とするが、生理学、病理学をも合せ説いていて、西洋医学の精髄を明快、簡略に紹介した傑作である。三年後の文化五年にその付図として「内象銅版図」が刊行された。これは亜欧堂田善の作である。日本で最初の銅版解剖図として名高い。おそらくこの付図は当時でも高価であったと推測する。

玄真は西洋の解剖書数種から訳しとって遠西医範三十巻をつくったが、厖大なので、その綱要をまとめて医範提綱と名づけ、この提綱をテキストにして門人に西洋医学の大体を講義した。門人の諏訪俊士徳がそれを筆記し整理して、医範提綱三冊本ができ上ったのである。玄真が用いた西洋解剖書の著者としてブランカルツ、パルヘイン、ヘルヘインインスロウの名が挙げられている。医範提綱は日本の医学に大きい影響をあたえたが、その一つの現われとして、「膵」や「腺」の字が初めて玄真の創始した国字として登場している。

売捌所／株式会社金原商店
製作所／財団法人日本医学文化保存会

日本医史学雑誌第二十四巻三号
昭和五十三年七月三十日発行　昭和五十三年三月十五日受付

「医の本質」と「医の倫理」、史的考察

三木　栄

「病を医するは自然である」、というヒポクラテスの言葉を、拙作の「医師の誓詞」の冒頭で掲げ、この「自然」と「医」との関係について、一九七七年岐阜での医史学会総会で私見を述べた、そして「医の本質」を、「自然」（ヒポクラテスのピュシス、山川草木の風景などを自然というは十八世紀からの派出語で原義でない）に求むべきであるとした。

今回は、これを敷衍し、「医の本質は自然である、生命力を尊び、医倫理の下、身心の病を癒し健康を増進せしめることである」、として、医の発生始原から、病を医す上に倫理が本然的に含まれ、五、六千年後の現在に至っていることを、史的に若干の説明を与えたいと思うのである。

未開原始社会では、突然の恐怖に脅かされる不可思議な出来事、天変地異、旱魃、洪水、飢饉、近隣からの侵入・殺戮、悪疫、病苦、衰老、死亡、などに対して、これらを防ぎ除くために、これらは魔物―怨霊―鬼神―病魔による祟りとして、原始宗教と見なされる巫術（シャーマニズム）、精霊崇拝（アニミズム）、祈禱、祭祀、呪い（マジナイ）、占（ウラナイ）（卜）い、祓（ハラ）い、護符（オマモリ）、などが行なわれる。これらを掌る者は魔法師―巫（フ）（女のみこ）また覡（ゲキ）（男のみこ）であるが、特に医術を行なう者は巫医―醫（巫而兼医者）で、北米土人では魔術師―メジシンマンという。原始的宗教なるものにおいては、これらは共存しているのである。心霊面の苦悩、受ける恩恵に対しては、超越的な存在―「神」に祈り寄り頼む法、身体面の苦痛に対し

ては、巫医に依る法である。しかしこの場合、神を信頼する真心がなければならないし、報いがあれば感動感謝の念が生じるであろう。それは芽生え的であろうとも、この間に道(ミチ)—倫(スジ)というものが起って来るであろう。

やがて文化が進んで来ると、安心立命を基とする教え—宗教では神の下、信仰祈願、これに真善美の心、愛敬慈恵の行ないが伴なう。これと軌を一にして医なるものにも、人人の生命を預かり病苦を癒すという行為からして、自ずから仁愛の心、倫理の心が生まれるであろう。倫理は、人間社会の秩序保持のために律法と共にあるが、宗教の面においては特に強く結び付いているのである（今云う宗教は、巫術から進化して教えとなったもの。因に巫術の祈願・占い・祓いのたぐいは、現在へ伝存し広く行なわれている）。

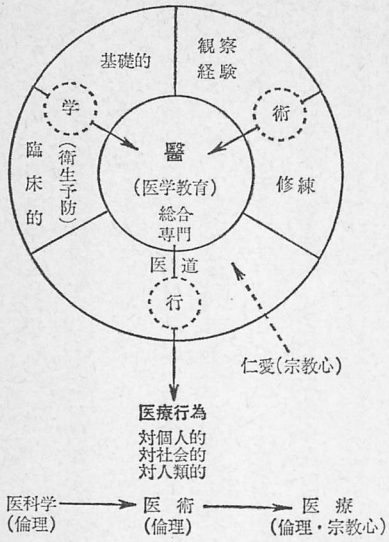
しかして、時代が下がり更に人知が増すにつれ、宗教と医術とは分離されて行く。宗教では、神が究極の拠点で心霊が主動的であり、それへの教義また戒律も定められ、固定化したものとなって来る。かくて身体(カラダ)に重きを置き理性的（技術化）であらねばならない医術とは、両者は進む方向を漸次異にして行く。西紀前五世紀のヒポクラテス医術においては、すでに原始宗教性の呪術また迷信なるものは排されて、実理性の医術—医学の成立となっており、しかも実行に当ってはこれを全うするため、医の倫理、医師への戒(イマシメ)や掟(オキテ)が強調されている。そしてアレキサンドリア医学、ガレノス医学と続くのであるが、しかし、欧州中世期では、キリスト教に支配された医学—僧徒医学となった、が、十五、六世紀のルネサンス期以降では、中心理念はヒポクラテス医学へ帰り、十七世紀特に十九世紀からは、科学的な医学となり現代に至っている。（現代でも俗信仰では宗教と医術とは混淆されている面もあるが、これは原始巫術的なものの残存であり、両者は別である。定着した教義を持つ大宗教では医学への介入はない）。（注、ヒポクラテスと同じ理性は、中国の扁鵲ら又インドでも見られる）。

因にまた言う、道徳 morality 倫理 ethics はほぼ同義で、これは国家の平和維持のため人間の理性から発し定められた「法」(ノリ)—法律と並んで、社会風俗の秩序保持のために遵守しなければならない人の道、人の倫(ミチ)（倫理は人倫の理法）である。医の場合は医道（医人道義）乃至医倫理で医学の向う正しい道を指す。人間社会での医行為における不完全性を是正し規

制する上に必要不可欠なものである。

私は、医学（広義）の全構成内容を三つに分けて、基礎医学（医科学）、医術（臨床医学・予防医学）、医療行為（これは医学の目的で主体）、として度々説いて来た。しかして、医科学 science にも医術 technique, art にも医療 practice にも本来の生成過程からして、倫理が総てに含まれているのであり、特に病者の身心と直結する医療行為では倫理は堅く密着したものであり、しかもなお宗教的な広い仁愛の心を伴なうのである（医者仁術也、仁術とは医術それ自体をいう）。よって私は、人間の身心の病をなおす医学は、単なる科学でなく、応用科学でもなく人文科学でもなく、特殊別格な科学的な学問と見なすのである。

私は、以上説いて来たところに従い、医の本質中に倫理は、これは時代・地域・環境によってて逕庭はあるが、医の生成始原から本然的に融けて含まれているもの、これが医学の中心の流れである、とするのである。ここに収めた図式は参考の一助としたものである。



因に，医科学および医術においても，倫理が含まれねばならない。かくて医療行為は更に全きものとなり得るのである。医の本質には始原から本然的に倫理が含まれる。

本春私は、『医師の誓詞、医学本質論』と題する小さい医の倫理書を刊行した。ご一読下されば幸いである。

本稿に付して、**医倫理史研究の必要性**について一言して置く。

医学の歴史的研究については、拙著の What is the History of Medicine ? 1976 中に各種の研究分野を「表」にして収めたが、これは扨置き、われらの学父である富士川游先生の『日本医学史』

の「序論」、また小川政修先生の『西洋医学史』の「緒言」にも説く如く、医史学（医学の歴史を科学的に史学研究法によって研鑽する学問）は、三つに大別せられる。

㈠ 「医学知識本体の歴史」、これは一般に言う医学史で、多種多様あり、各国の医学史・各科の医学史・診断治療史・医事年表・医人伝記など。

㈡ 「医倫理史」―医人道義学史、医家の社会的地位、医学教育史など。

㈢ 「疾病史」―歴史地理的病理学、各種疾病史・伝染病史など。

現今の日本医史学会では、主として㈠の医学的知識の歴史に研究が集まっているようである。医学の目的は、身心の病を医するにあり、医史学は、これの本源を探り変遷を明らかにし、向かう正しい道を求め、医学の進歩に寄与するにある。これを統合し研究するには、㈢の疾病の歴史、㈡の医の本質中に融合している医倫理その史的研究をも、より表に出し、より正しい医学本体の全貌を探求しなければならない。特に各般の医倫理問題を検討し、全医学向上の指針となるよう心掛くべきと思われる。これには、医史学からの研究が一番の捷径と、私は信ずるのである。

〔追　記〕

医学における倫理史の研究には、一般倫理並びにその史的知識を必要とするが、医療行為は特殊分野の専門職業であるので、医倫理は特別視され、独自の性格のものが、始原時から行なわれていたのである。

日本にては、唐の千金方から引用した『医心方』巻第一「治病大体」中に初めて道義文が見られ、以後、これを踏襲したものが医書に散見されるに過ぎない。しかし江戸期に入ると「延寿院医則」・「養寿院医則」の外、多種多様の倫理関係書があり、蘭医学―西欧医学の受容時にはフーフェランドの「医戒」が重んぜられた。明治期でも可成り多く、特に現時の混沌とした医界では、この種の単行書が実に多く刊行されている。

富士川先生は、夙に『日本医学史』や『医箴』その他多くの著述において、医は科学であっても芸術であり宗教的であ

るとし、医人の道義を強調されている。

中国では、上古殷周時代から医倫理関係文があり、これらは清朝康熙時の『古今図書集成』「医部全録」巻五百一―五百三に、五十一家による論医・医則・習医規格・五戒・十要のたぐいが集め載せられてあり、通覧するに便利である（間〻これらの英訳抄本もある）。

インドでは、「カラカ」や「ススルタ」に収められているものが、代表視されているようである。

回教圏では、コーランによる戒律が主動であり、アヴィケンナやマイモニデス等の医書中にも含まれている。

西洋のものは、大宗ヒポクラテス以降、論著注釈は汗牛充棟、主体はキリスト教を背骨とした医倫理である。

以上医倫理書で主要と思われる若干は、拙著『体系世界医学史』第三部中の思想・哲学・宗教・倫理の条項にも、書題名だけであるが考拠の資として掲げてある。

一九七八・三・二五宮崎総会の口演稿

Medical Ethics and The Essence of Medicine

by

Sakae MIKI

"The essence of Medicine is Nature. It aims to respect life, to cure the diseases of the body and mind and to promote health. It must do this all within the framework of medical ethics."

Medical ethics has been inherently in harmony with the art of medicine from its genesis. It can not be separated from a religious ethic and it remains as the core of the essence of medicine to this day.

It is my purpose to explain this relationship chronologically from the standpoint of medical history.

日本医史学雑誌第二十四巻三号
昭和五十三年七月三十日発行　昭和五十三年三月十四日受付

佐々木中沢と刺絡

山形敞一

一、まえがき

一関藩医員建部清庵由水に外科を学んでいた佐々木中沢は宇田川玄随の西説内科選要を読み、同郷の先輩大槻玄沢に八刺精要の著述のあることを知り、江戸に出て玄沢の芝蘭堂に入門したのは文化十二年（一八一五）二十五才の時であった。中沢は玄沢から蘭方外科を学ぶ傍ら、馬場佐十郎、桂川甫賢について蘭学を学び、蘭方外科学者として認められ、桂川甫賢より家蔵のゴルテルの外科書を与えられ、文政五年（一八二二）二月瘍科精選の訳述を終えたが、仙台着任後刊行されるに至らなかった。

因みに桂川家蔵のゴルテルの内科書は宇田川玄随に与えられ、西説内科選要として寛政四年（一七九二）刊行され、中沢の江戸遊学の機縁となったのである。

佐々木中沢は文政二年（一八一九）大槻玄沢の瘍医新書誘導編の校訂を行い、南小柿寧一の存真図の跋文を書いたが、桂川甫賢の推薦により仙台藩医学校の外科教授として仙台に着任したのは文政五年（一八二二）三月であった。

二、瘍医新書と八刺精要

文政八年（一八二五）刊行された増訳八刺精要の奥付けによると、大槻玄沢飜訳の瘍医新書として出版されたのは誘導編四冊、要術知新三冊、刺絡篇三冊であった。

瘍医新書の原本はドイツ国ヘルムスタット大学外科教授 Laurens Heister の外科書をオランダ国アムステルダム大学講師 Hendrik Ulhorm が蘭訳して享保九年（一七二四）に出版されたものである。佐々木中沢の増訳八刺精要題言に、「初鶚斉杉田先生欲訳行其全書。而金創篇僅得卒業、名曰瘍医新書（中略）。乃俾磐水先生續之。先生勤苦従事、全訳殆成。如斯篇則先生少時従蘭化先生、学西文之初、請口授而筆録、姑名曰八刺精要者也（中略）。以全訳未成、繕写未遑、故祕之帳中、不図為人被竊写、早伝世間、草卒訛脱、非復原訳之旧（後略）」と記されているように、大槻玄沢が杉田玄白の訳業を継承した瘍医新書の誘導編は寛政二年（一七九〇）稿了し、佐々木中沢が校訂して文政八年（一八二五）刊行されたが、さらに玄沢が前野良沢の口授を筆録したものが八刺精要である。なお、宇田川玄随の八刺精要題賛に対する佐々木中沢の追記によれば、八刺精要の新訳の竣功は寛政四年（一七九二）であり、中沢の増訳八刺精要の竣功は文政六年（一八二三）である。

大槻玄沢は瘍医新書の序文のなかで、わが国における外科の沿革を述べ、誘導編では医人の徳義、外科医の職分、諸般の徳行措置を教示している。

ハイステルの外科書のうち、創痍編十巻、骨傷・脱臼編五巻は刊行されず、手術編より繃帯編は大槻玄幹の外科収功（文化十一年）、尻臀部は玄幹の要術知新（文政六年）、刺絡編は佐々木中沢の増訳八刺精要（文政八年）として刊行されたが、これらの訳書によって、わが国における西洋外科の基礎が始めて置かれたものと考えられる。

増訳八刺精要題言に、「有一書生駿人也。出一冊子、示余日、曩在郷里、重価獲之。余取閲之、即此篇也（中略）。但数

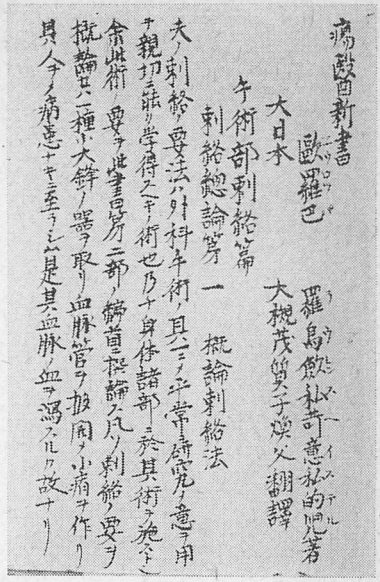

瘍醫新書
歐羅巴
羅馬
大日本
大槻茂質子煥父翻譯
手術部刺絡篇
刺絡總論第一　概論刺絡法

図 1

経転写、脱誤極多」と記されているように、八刺精要は転写、伝世の間に脱誤の多いものとなっていたようである。

津田進三氏蔵の八刺精要は瘍医新書手術部刺絡篇（図1）で、享和元年（一八〇一）十一月横川温の八刺精要序によれば、大槻玄沢に入門した小石元俊が玄沢の飜訳した八刺精要を筆写して京師に持ち帰っていたのを寛政十二年（一八〇〇）春に元俊に入門した橋子緝が精写して友人横川温に授与したもので、奥付けによると文政四年（一八二一）四月奥田玄條がさらに伝写したものである。

本書は刺絡総論、刺肘中法、刺腕前法、刺足跗法、刺顳顬法、刺内背法、刺頭茎法、刺舌下法、刺陰茎法、誤傷唵畿莫止思篇、誤傷神経筋根篇、誤傷動脉篇、スラグアデルスパット篇の十三篇に分れているが、唵畿莫止思（ニヤモシス）については、「羅甸言曰エキモスシ、是其刺ス中ニ當テ其絡裏ニシテ誤刺シ脉管及ヒ皮膚肉理等の間罅ニ及ヒ敗血ソノ部ニ溢レ、為是瘀腫及ヒ膿腫等ノ諸変ヲ発スルモノ是ナリ」と記しており、またスラグアデルスパットについては、「夫「スラグアデルスパット」ト称スル者ハ動脉毀傷ヨリシテ腫発スルノ症也」と述べている。

刺肘中法其三に、「茂質按、解体新書脉篇脾脉左手背近指之処、是因原書所訳也、今其原本「ターヘルアナトミイ」参考、其集説肝脉行左手者各脾脉右方即肝脉也。乃チ古ノ解体家所命ノ名也。従原文所説則手背之絡ナリ。按スルニ苛意私的所説也乎」と記しており、クルムスの原本と校合していることがわかる。また、其十三に、「若其人素塞性及柔弱、煮肉汁、或サレキ、或茶、或コツヘキノ類ヲ取テ温服セシムルヲ良トス」という文中のコツヘキについて、「草実、国人食

後煎煮而飲服者恰如茶、此方曽不産」と註している。さらに、スラグアデルスパット篇其十の文中の「アルムスラクアデル」について、「此飜曰臑動脉、茂質按、解体新書動脉篇中無有此名者。取其原本タアヘルアナトミイ讀之、考索之注疎則腋脉之支派（中略）、再按是取腕後動脉等之原於此者也」と述べ、其十一の文中の「ブルードステムペンドホクト」について、「方名、羅甸名アークアステキプシカ、此訳曰止血汁、俟再考」と註記している。

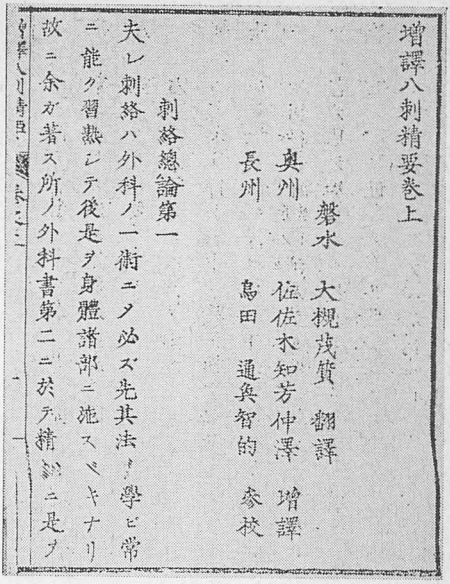
したがって、増訳八刺精要題言に、「願校此篇、以公干世、使執斯術者、得盡其法、則恵莫大焉。先生可之、遂賜原訳、使烏田智的、相其對讐、是余之所以従事此篇也」と記しているように、大槻玄沢の瘍医新書誘導編の校訂に従事した佐々木中沢が刺絡編の増訳を任せられたことは当然であろう。

三、中沢と増訳八刺精要

文政五年（一八二二）閏正月に記した佐々木中沢の増訳八刺精要題言によれば、中沢が一関から江戸に出て大槻玄沢に従学したのは八刺精要の訳述を知ったためであり、玄沢の依嘱により烏田智的とともに増訳校訂に従事した由来が明らかにされている。

また、校訂に参加した烏田智的の跋文によれば、文政四年（一八二一）十月に増訳八刺精要の校訂が終り、文政五年閏正月に佐々木中沢が題言を記し、同年二月桂川甫賢、同年三月斉藤方策の序文を得たが、仙台着任後、同年八月仙台藩医学校学頭渡部道可の序文を得て、文政八年（一八二五）漸く出版された（図2）。大槻玄沢が本書の出版に多大の尽力を惜しまなかったことは中沢宛の玄沢書翰からも明らかである（『日本医史学雑誌』、昭和五十二年一月）。

本書の目次によれば、巻上は刺絡総論、刺肘中法、巻中は刺手背法、刺足跗法、刺額上及顳顬法、刺内眥法、刺頸側法、刺舌下法、刺陰茎法、絡外溜血、誤傷神経及腱、誤刺動脉、刺顳顬動脉法、刺眼目法、巻下は角法、蜞鍼法、辨多血質法、刺絡、預當辨知、刺禁器具図解の三巻より成り立っている。このうち「眼目刺法、及顳顬動脉刺法、原本不収諸刺


増譯八刺精要卷上

磐水　大槻茂質　翻譯
奥州　佐佐木知芳　仲澤　増譯
長州　島田一通　奥智的　參校

刺絡總論第一

夫レ刺絡ハ外科ノ一術ニヤ必ズ先其法ヲ學ビ常ニ能ク習熟シテ後是ヲ身體諸部ニ施スベキナリ故ニ余カ著ス所ノ外科書第二ニ於テ精詳ニ是ヲ

図 2

絡篇中、而別立之篇。如角法蜌鍼法（中略）、就原本、抄出而訳之。又如刺絡預當辨知、並多血質辨法、刺禁等、原本不収之。今節訳削墨児書補之、悉附巻末」と題言に記されているように、本書はショメールの厚生新編を参照して増訳したことが明らかである。

巻上の刺絡総論の第六章に、「凡ソ身体中刺絡ヲ施スベキ定処アリ。則チ肘中、足肘、額上、顳顬、頭頸、舌下、陰茎、已上七処ナリコレニ手背ヲ加テ八処トナル本書ノ名由テ出ル所ナリ等ナリ、中ニ就テ肘中ノ絡ニ施スコト最モ多シ」と記されて、八刺精要の由来が明らかにされている。

次に、刺肘中法の第六章に、「知芳今年来貢ノ和蘭医丟盧霊倔ニ原書ヲ出シテ是ヲ質スニ墨私ニ大小数種アリ、二墨私背ニテハ四分許ニシテ尤長キニ過グ、馬ニ施ス刺絡ニアラザレバカヤウニ鍼口ヲ大ニスルコトナシト答フ。サレトモ原書ニ墨私背ヲ以テ物ノ長短広狭ヲ較フルモノ極メテ多シ（中略）。原書通シテ一ト墨私背ノ幅トイフモノ大凡一分許ニ過ス、決シテ右ノ医生ガ言フ所ノモノニアラズ。故ニ茲ニイフ所ノ二刀背ハ大凡二分許ト心得テ可ナリ。又丟盧霊倔予ニ語テ曰、凡ソ鍼ヲ施スニ急証ニシテ速ニ瀉セント欲スルトキハ鍼口ヲ広クスベシ、否ラザレバ鍼口ヲ大ニスルコトナシ（中略）。此説甚ダ学者ニ益アリ、故ニ此ニ附記ス」と註記している。すなわち、佐々木中沢は文政五年三月江戸に参府した和蘭商館医員チュルリングと刺絡について質疑を行い、仙台着任後にこの註を記したことが明らかである。

また、第十三章に、「術ヲ施シ訖リ少頃アリテ飲ヲ欲スル者ニハ水漿ノ飲料ハ之ヲ与ヘテ可ナリ。若シ其人寒性カ或ハ

虚弱ノ者ナラバ煮肉汁　豬牛ノ肉ヲ煮、タル清ナリ　沙禮未ダ詳ナラズ社友長傷足立氏青霍香ヲ出シテ西医丟盧霊倔ニ示スニ即チ沙禮ナリトイヘリ考フベシ茶或ハ可喜木実ノ名彼土常ニ湯ニ泡起シテ飲服スルモノナリノ類ヲ温服セシムルヲ勝レリトスルナリ」と註記し、さらに、刺額上及顳顬法に、「風領彼土平日風領ヲ用テ頭茎ヲ纏フ是俗習ナリ」、絡外溜血の第四章に、「琶布諸薬ニ蒸餅又ハ麺粉ヲ加ヘ煮テ泥糊ノ如クナシタルモノナリ、附録ニ出ス」、誤刺動脉の第二章に、「失結兒令窟銀銭ノ名ナリ周二寸八分径八分彼土ノ銭貨ハ総テ無孔ナリ」と註記し、中沢が西洋の事情にも通じていたことがわかる。

なお、玄沢の八刺精要では唵畿莫止私と原語で印したものを中沢の増訳八刺精要では絡外溜血という訳名を記し、「血溢出シテ脉管と皮肉トノ間罅ニ溜瀦スル者ヲイフ」と述べ、また、玄沢の八刺精要の誤傷神経筋根は中沢の増訳八刺精要では誤傷神経及腱と改められたことは妥当である。

四、中沢と厚生新編

佐々木中沢の増沢八刺精要題言に、「今節訳削墨兒書補之」と記されていることはすでに述べたが、削墨兒書とは厚生新編のことである。

大槻如電の新撰洋学年表（大正十五年十一月）によれば、「文化八年五月幕府新に天文方に蠻書和解御用の飜訳に備ふ、馬場左十郎、大槻玄沢を訳員とす（中略）。百科全書の反訳にて厚生新編と題す原書ハ仏蘭西人ヌールショメイル所撰西暦一七四三年和蘭重訳のもの、撰者の名を書名に呼び、此訳書の業をショメール御用と称したり」と記されているが、厚生新編の訳編初稿大意によれば、文化八年（一八一一）三月一日幕府浅草暦局（天文台）の訳生馬場左十郎に官府御蔵ショメイル八巻の全訳を命ぜられ、次いで六月大槻玄沢に和蘭書籍和解御用に従事するよう命ぜられ、馬場左十郎の訳草を大槻玄沢が再校参訂して訳稿をつくったのが厚生新編で、文化八年訳稿の出来たもののなかに医療法方部巻之一刺絡があった。

厚生新編は当時官庫の秘書とされていたが、大槻玄沢の中沢宛書翰によれば、文化十四年（一八一七）九月玄沢と宇田川玄真が訳稿を完了した蒲桃酒の原稿を中沢は借覧し、医学校で葡萄酒を新醸して仙台藩の国産増加を目論んでいた（『仙

台郷土研究』、昭和十八年、昭和二十二年)。

仙台藩の医学校蔵書目録(東北大学医学図書館蔵)によれば、協乙斯的兒(二本)、我爾徳兒(一本)、華盧茉(二本)、諸厄利斯歐兒電剝苦(一本)のような洋本のほか厚生新編二本が所蔵されていたが、これは前述の厚生新編第十六巻蒲桃酒のほか、伊達伯観瀾閣図書印のある厚生新編医療法方部巻之一刺絡(図3)であったと考えられる。

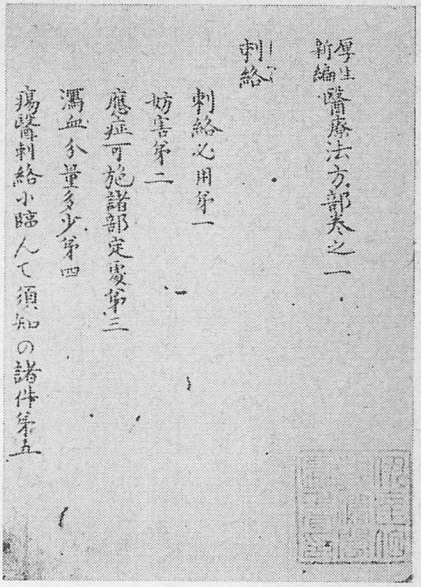


図 3

増訳八刺精要巻之下蛍鍼法の第二章に、「按ニ削墨兒曰ク肝癰及ビ総テ肝脾ニ因スル諸病ニ嬭脉ヲ刺シテ血ヲ瀉スルヲヨシトス」、また辨多血質法の冒頭に、「削墨兒曰ク、多血質トハ総テ脉管ニ血液ヲ有スルコト過多ナル人ヲイフナリ」、さらに、刺絡預當辨知の冒頭に、「削墨兒曰ク、大凡刺絡ヲ施スニ預メ知ルヘキ諸件一ニシテ足ラズ(中略)。余偶空私盧ノ書ヲ閲スルニ人身ノ諸液ハ月ノ盈虚出入ニ従テ増減スルコトヲ論ジ、又我爾徳兒ノ書ニ説ク所モ是ト同フシテ(中略)、社中ノ経験スル所暗ニ二子ノ説ニ合スルニ似タリ。姑ク記シテ後案ニ具フ」と記し、刺禁の冒頭でも「削墨兒曰ク、鬱閉ニヨツテ致ス所ノ長病ノ人或ハ老年或ハ禀賦虚弱ノ人(中略)、或ハ病勢既ニ除テ虚憊未ダ復セザル人等ノ如キハ必ズ是ヲ刺スコトナカレ、大害ヲ招クコトアリ。又曰ク老年衰弱ノ人或ハ精神虚乏スル者、或ハ萎尪羸憊シテ其脉弱ナル者或ハ脉来ルコト斉シカラザル者或ハ敗黒胆汁病総テ臓腑虚弱ノ者必ズ是ヲ刺スコトナカレ」と述べ、「按ニ厳ニ酔人ニ刺絡ヲ施スコトヲ禁ズベシ」と註記しているのは妥当な見解である。

なお、厚生新編の刺絡の文中に、就中協乙斯的兒の外科書に説く所、極めて精審ヲ盡セリ(中略)。其外科書ハ杉田玄白

訳稿を起し、題して瘍医新書と名く、其手術部第一刺絡篇あり、茂質往年其篇を抄訳して仮りに八刺精要と名付く」と註記しているのは八刺精要成立の事情を示す記載である。

五、刺絡の沿革

大槻玄沢の八刺精要の刺絡総論其二および佐々木中沢の重訳八刺精要の刺絡総論第二章に、刺絡の由来について述べている。「刺絡ハ古来外科手術中ニ於テ極テ効験アル一良法ニシテ既ニ世ニ行ハルルコト三千餘年ニ及ベリ。依卜加刺得私(イポカラテス)往昔ノ医聖名泄盧修斯(セルシュス)人名及ビ其佗古人ノ外科書ヲ見テ知ルベシ（中略）。厄刺悉私答刺出私(エラシスタラシュス)・巴刺色爾師(バラセルシュス)私・黒爾門低烏私(ヘルモンチウス)・波爾(ポル)低烏私(チウス)・蓬鉄孤(ボンテク)・翠歇麻(ゲルマ)以上其古人名及ビ其他ノ名師モ尚コレヲ誹議ス」。

Ackerknecht 教授の Therapie von den Primitiven bis zum 20. Jahrhundert（一九七〇）によれば、Hippokrates 以来の液体病理学的治療の三原則は瀉血（すなわち刺絡）、吐剤、下剤であり、Boerhaave（一六六八―一七三八）や Hufeland（一七六二―一八三六）のようなわが国の蘭学者に大きい影響を与えた西欧の碩学でさえ、瀉血を好んで治療に用いていた。当時、瀉血を積極的に斥けたのは Pinel（一七九五―一八一六）や Magendie（一七八三―一八五五）を中心とするパリー学派であったが、二十世紀に入って化学療法剤の発達とともに瀉血の適応は全く制限されたものとなった。

大槻玄沢は八刺精要の刺絡総論其二のなかで、「蓋医タル者平常ニコレヲ研究シテ学ヒ、其要法導キ諭シ、其ヲシテ慎ミ行ハシメ必軽忽ニスルコトナカレ。常ニ術ノ粗ニシテ過失ヲナシ其症ニ逆シ、種々ノ疾病ニ変シ虚脱ニ至ルモ多クアルナリ」と慎重論を述べているのに対して、佐々木中沢は増訳八刺精要の刺絡総論第二章で、「コレヲ今日ニ質験スルニ能ク諸病ヲ療理シ殊ニ偉功ヲ奏シ奇験ヲ得ルコト顕然トシテ著ルシク、固ニ医術中ノ一良法ナリ。然則世ノコレヲ誹議讐視スルモノ却テ恥ヲ貽シ道ヲ誣ルト云ベシ」と積極論を述べ、また刺絡預當辨知では、「其時日ニ拘ラズシテ施スベキ者ハ心胸痛、肺癰、咽喉病等甚ダ危急ニシテ即時ニ刺絡セザレバ其命保ツコトヲ得ベカラザル諸症ナリ」と刺絡の絶対的適応

について述べている。

この両書の記述の差は玄沢と中沢の性格の相違を反映しているものであり、玄沢が仙台藩医員として番頭の次席、三百石を給せられ、また幕府天文台訳員として月俸五口を賜り、文政十年（一八二七）七十一才で病歿し、また文政壬午女囚解剖のとき中沢の存真図腋に対して解体補義を著して家蔵していた佐々城朴安が医学校教授より番医師近習に進み、文久元年（一八六一）七十七才で病歿しているのに対して、中沢は文政八年医学校退職後舌禍のため一関に三年間屏居を命ぜられたのち、仙台の町医師となり、弘化三年（一八四六）五十七才で病歿したのも中沢のこのような性格によるものでなかったかと考えられる（『日本医史学雑誌』、昭和五十年）。

六、むすび

刺絡すなわち瀉血は素問・霊枢にも記されており、菅沼周圭の鍼灸則（明和四年、一七六七）や荻野元凱の刺絡編（明和八年、一七七一）が出版されてから、わが国の漢方医家によって行われるようになった。しかるに、ヒポクラテス以来の液体病理学説が主流となっていた西洋医学では刺絡は吐剤、下剤と並んで最も重要な治療法と見なされていたが、わが国の蘭学者のなかで最も早く刺絡に注目したのは大槻玄沢で、前野良沢の指導を受けてハイステル外科書の手術部刺絡篇を飜訳し、八刺精要と名付けて家蔵していた。本書は未刊のまま伝写されたために訛脱も多かったので、佐々木中沢は玄沢の依嘱を受けて増訳八刺精要の訳述をすすめ、和蘭商館医員チュルリングと質疑を行い、コンスルやゴルテルの外科書を参照し、仙台藩医学校教授として着任後も玄沢より厚生新篇の医療法方部巻之一の刺絡の訳稿を送られて増補し、宇田川玄随の題賛や校訂者烏田智的の跋文についても玄沢の庇護を受け、文政八年（一八二五）漸く出版された。本書によって、わが国でも刺絡は正しい方法と適応をえらんで実施されるようになった。

なお、八刺精要と増訳八刺精要を比較してみると、玄沢の刺絡に対する慎重な態度に比べて、中沢の学識は顕著である

ものの、刺絡に対する積極的な態度をとっているのが対照的であり、文政八年（一八二五）医学校退職後に中沢が舌禍を蒙り、郷里一関に三年間屏居したのも中沢の性格に根ざしたものでなかったかとも考えられるのである。

追記、本稿の要旨は第七九回日本医史学会総会で発表したが、八刺精要（写本）を貸与された津田進三氏に深甚の謝意を表する。

Chūtaku Sasaki; his Role Relating to Venesection

by

Shoichi YAMAGATA

A part of the translation of Laurens Heister's book of surgery, done by Gentaku Ohtsuki, a medical staff member of the lord of Sendai, by the request of Genpaku Sugita was revised by Chūtaku Sasaki and was published under the title Yōishinsho-Yūdōhen in the 8th year of Bunsei (1825). However, the other part of that translation, Yōishinsho-Shirakuhen, done by Gentaku with the guidance of Ryotaku Maeno was not published although the title Hasshiseiyō was already given to that planned book. Chūtaku Sasaki became a disciple of Gentaku Ohtsuki of Edo in the 12th year of Bunka (1815) and received the request from Gentaku to revise the Hasshiseiyō. Chūtaku did this consulting Gorter's Surgery and the Kōseishinpen, and the revised version of Hasshiseiyō was completed and published in the 8th year of Bunsei (1825). With the publication of this book, the exact technique and true criteria of venesection were first introduced in Japan and became popular. In Hasshiseiyō one can find the rather reserved attitude of Gentaku toward the venesection which can be compared with the positive attitude of Chūtaku revealed in his revision although his vast knowledge and deep understanding can also be appreciated in that book. This difference may come from the difference between the personality of both of these eminent men of medicine of that era.

日本医史学雑誌第二十四巻三号
昭和五十三年七月三十日発行　昭和五十三年三月十日受付

ニコラース・トゥルプ（I）

古川　明

はじめに

ニコラース・トゥルプはレンブラントの名画「解剖学講義」に描かれたことで、一般に知られている。江戸時代の蘭学期には、その名が現われなかったようであるが、ブールハーヴェをはじめ、多くの有名な医師を生んだ最盛期のオランダ医学の基礎をきずいた医学者の一人で、後世に残したかれの業績は少なくない。またアムステルダム市長としての、二〇年にわたる政治的手腕も認められている。さきに筆者[1]はレンブラントの名画「解剖学講義」について報告したが、これに次いで、医学史に残したトゥルプの伝と業績を報告したいと思う。

トゥルプの略歴

トゥルプの伝は、Thyssen,[2] Heckscher[3] らの著述が最も詳しいし、Goldwyn,[4] Bluefarb,[5] Gordon[6] らの報告もあるので、主としてこれらを参考とした。

トゥルプ Nicolaas Tulp（一五九三―一六七四）の本名は Claes Pieterszoon ラテン名は Nicolaus Petrus である。アムス

テルダムの自分の家の前が、チューリップの球根の競売所であったこととか、家の入口にチューリップの花が彫られていたことなどから、チューリップのオランダ語 "Tulp" の名でよばれた。

トゥルプは一五九三年一〇月一一日に、Pieter Dirks という裕福な商人の四児の末子として生まれた。中等教育を卒えたあと、ライデン大学で、Paaw, Bontius, Heurnius, Vorstius ら有能な師について医学を修め、"Dissertatio de Cholera Humida" の論文を提出し、一六一四年に同大学を卒業して、医師となった。まずトゥルプを育て上げたこれらの師の略歴に触れてみよう。(7)

パーウ Pieter Paaw (一五六四—一六一七) は Pauw Pavius ともよばれ、トゥルプが最も尊敬して師事した学者である。アムステルダムに生まれ、ライデン、パリ、オルレアン、ローストクで医学を修め、一五八七年に医師となった。パドア大学を経て、一五八九年にライデン大学の植物学の教授となり、ライデンに植物園を開いた。またパリのファーブル J. Fabre (生死年不明) やパドアのファブリチウス H. Fabricius (一五三七—一六一九) について解剖学を研修し、一五九二年には、解剖学の教授に任命された。パドア大学についでライデン大学に、ヨーロッパで第二番目の解剖階段講堂を造った。一五九八年にはじめての公開解剖を行ない、一九年間に六〇人の人体解剖と多くの動物の解剖を行なった。著書に "Primitiae anatomicae de humani corporis ossibus (Leiden 1615)" がある。この書の扉絵は大勢の見学者に、解剖を供覧しているパーウを描いた立派な画で、コルステル Justus Colster の筆である。なおパーウの肖像画は、ここに掲げた作者不明のもの (図1) のほか、ハーグの王立美術館に、

図 1
トゥルプの師パーウ
Pieter Paaw
(Lindeboom より)

Jacobus de Gheyn の描いたもの（一五九七）がある。[8][9]

ボンチウス Reinier Bontius（一五七六―一六二三）はライデンに生まれ、はじめ哲学を、次いで医学を修め、一五九九年に医師となった。一六〇三年にライデン大学の哲学の教授、三年後に医学の助教授に転じ、一六一七年に正教授となった。一六一八年には王室の侍医に選ばれ、軍医としても働いた。かれの父 Gerardus Bontius も医師だったが、親子ともに後世に残すような著述がない。同時代に、Jacobus Bontius（一五九九―一六三一）という有名な医師がいたが、これは別人である。

ヘゥルニウス Jan van Heurnius (Heurne)（一五四三―一六〇一）はユトレヒトに生まれ、はじめはルーアンで医学を修めたが、一五六三年にパリに行き、さらにパドアに移り、一五七一年に医師となった。二年間グランウェル公 Graaf van Granvelle の侍医を勤めたのち、ユトレヒトに戻り、そこで一五八一年まで医業を営んだ。その後は死ぬまで、ライデン大学の教授を勤めた。

フォルスチウス Aelius Everardus Vorstius（一五六五―一六二四）は Roermond に生まれ、一五八〇年からライデンのほか、ドイツとイタリアで勉強し、一五九四年に医師となった。一五九九年に、ボンチウスの死後、ライデン大学の医学の教授となり、一六一七年パーウの死後、植物学の教授を兼ね、死去するまでその職にあった。理論的に医学を講義し、ヒポクラテスを高く評価し、その熱心な研究家であった。かれの学問は哲学、史学、考古学、海洋学、貨幣、紋章など、広範囲にわたり、ハーレム海の干拓についての計画案まで作ったという。

トゥルプは以上のような優秀な学者に師事し、一六一四年に医師となってから、アムステルダムに戻って開業した。一六二二年には、市会議員三六名中の一人に選ばれ、一六二八年に市長や市会の推せんで、外科医組合 Chirurgijns-Guild の解剖学講師 Praelector anatomiae となった。そこで一六三二年に、新進画家レンブラント Rembandt Harmenszoon van Rijn（一六〇六―一六六九）によって、名画「トゥルプの解剖学講義」（ハーグの王立美術館所蔵）が描かれたのである。

当時トゥルプは三九歳の働き盛りであり、レンブラントはまだ二六歳の若さであった。[1]

トゥルプは一六一七年に、Aafge van der Voegh と結婚し、五人の子女を得たが、一六三〇年に妻に先立たれ、その後アウツホルン・アムステルダム市長 Cornelis de Vlaning van Outshoorn の娘 Margriet と再婚し、三人の子供を設けた。かれの一人の娘 Margaretha は一六五五年に、レンブラントの後期のパトロンであるシックス Jan Six（一六一八―一七〇〇）の妻となった。シックスははじめ染物業を営んでいたが、結婚当時はアムステルダム市の官職につき、自らも一六九一年に市長となった人物で、レンブラントをはじめ巨匠の絵画の収集家として有名である。レンブラントの描いたヤン・シックス像（一六五二）は、ヨーロッパ絵画史上の肖像画の傑作の一つとされ、アムステルダムのシックス財団（Amstel 218te）に、シックス収集 Collectie Six として所蔵されている。[10][11][12] トゥルプの孫は約二〇名で、良い祖父として、好々爺振りを発揮したという。

トゥルプの肖像画に、Nicolaes Eliasz-Pickenoy（一五九一―一六五五）の描いた中年期（一六三四）のものがあるが、この画は画伯の娘が無料で、トゥルプの治療を受けたときの謝礼として贈ったもので、現在シックス収集の一つとなっている（図2）。ろうそくの炎を右手で指さし、Aliis inserviendo consumor（他人に奉仕して、自分は次第に消え去る）と下に記されている。[8][13] 一六三四年にレンブラントはトゥルプを描き、Artus Quellinus（一六〇九―?）がトゥルプの石像を作ったというが、詳しい記載は見あたらない。[2] トゥルプの肖像画はそのほかに、画家フィッシェル Cornelis Visscher の描いた七九歳の老年期のものがあり、後に記すトゥルプの著書の付図となっている（図3）。[7][14]

図 2
トゥルプ Nicolaas Tulp
(Nuyens より)

トゥルプは一六五三年に、アムステルダム市長に推せんされる直前まで、解剖学の研究と教育に、医学者としての生活を二四年間続けた。トゥルプの医師としての名声はすこぶる高く、Keizersgracht の自宅から四輪馬車に乗って、アムステルダム市内を往診する、その珍しいすがたは有名だったと云われる。かれは市長に就任することになったので、外科医組合の講師を辞任し、その地位は後任者デーマン Johannes Deyman（一六二〇—一六六六）に継がれた。

図 3
トゥルプ Nicolaas Tulp
(Hirsch et al. より)

トゥルプは医学者としてのみならず、政治家としての才能も持っていた、一六五四年に正式にアムステルダム市長に就任し、五五、六六、七一年の三回に再選され、死去するまで約二〇年間その職にあった。市長になる前一六四九年に、市役所の所員の信頼を受けて、孤児管理職となり、市長になってからも、一六六〇年に再任された、また一六四五年にはアムステルダム市の出納官の一人となり、一六五四、五九、六〇、六八、六九、七〇、七二年に再任された。一六六六年には、高等学校 Atheneum Illustra (Illustre Scholen) の評議員となった。アムステルダム高等学校 Atheneum te Amsterdam はこの種の学校として、オランダで最も古く、一六三二年に、Vossius と Van Baerle によって創設され、のちにアムステルダム市立大学となって、今日に至っている。[8] トゥルプはまた、アムステルダムを含むホーラント州や西フリースラント州の代表者の委員会 Commiteerde Raden の委員を、一六六三—六五と、一六七三—死去までの二回勤めた。今から約三〇〇年前、一六七四年の九月一五日に、ハーグで開かれたこの委員会の席上で倒れ、八一歳の生涯を閉じたというが、死因は記載がない。

のちに、ブールハーヴェ Hermann Boerhaave（一六六八—一七三八）らによって隆盛を来したオランダ医学の基礎をき

ずいた医学者として、トゥルプのはたした功績は大きい。かれは医師の倫理にも関心を持ち、晩年に医学箴言を自分の著書に付け加えた。トゥルプを描いた切手は、レンブラントの名画のなかのものだけだが、アムステルダム市会議員勤続五〇年を記念して、一六七二年一月二八日に発行された銀貨がある(8)(図4)。これは現在ハーグの王立貨幣室 Penningkabinet に保存されている。

図 4
アムステルダム市会議員勤続50年記念銀貨 (1672. Tulp)
(Lindeboom より)

当時のオランダは一五六八年より、占領国スペインに反抗して、独立戦争を起こし、いわゆる八〇年戦争(一五六八—一六四八)中であったが、一六〇九年の休戦条約によって、事実上独立が達成されていた。しかも、独立戦争の前後には、ユグノー戦争(一五六二—一五九八)、ドイツを舞台とした三〇年戦争(一六一八—一六四八)などで、周囲の諸国は戦乱状態が続いていた。これらの戦争に比較的影響の少なかったオランダ、ネーデルラントは文芸、美術、科学、商業、貿易など、各方面に隆盛を誇ったいわゆる「黄金の世紀 Gouden Eeuw」であった。バロック美術の巨匠レンブラント、フランス・ハルス Frans Hals (一五八〇—一六六六)、科学者ホイヘンス Christiaan Huygens (一六二九—一六九五)、哲学者スピノーザ Baruch (Benedictus) de Spinoza (一六三二—一六七七)、少し古くなるが、宗教家、人文学者エラスムス Desiderius Erasmus (一四六六—一五三六)ら有名な人物をあげることができる。

しかし、ウェストファリア条約(一六四八)で、正式に独立を認められたものの、これに相つぐ英蘭戦争(第一次は一六五二—五四、第二次は一六六四—

六七、第三次は一六七二―七四)、およびフランスのルイ一四世によるネーデルランド継承戦争(一六六七―六八)やオランダ侵略戦争(一六七二―七八)などが続き、アムステルダム市長を勤めたトゥルプとしては、多事多端なときであっただろう。トゥルプの活躍したころの日本は、ちょうど鎖国となり(一六三九、寛永一六)、オランダ商館が平戸から長崎の出島に移ったときで(一六四一)、南蛮医学からやがて蘭学期に入ろうとしていたころである。

トゥルプの医学業績

トゥルプの医学業績をまとめた書物として、"Observationum medicarum libri tres"(医学観察三巻)がある。[14] 通称 Observationes Medicae で、ラテン語で書かれ、一六四一年にアムステルダムのエルゼウィアー Daniel Elzevir 社で、初版が発行されてから数版を重ね、オランダ語にも翻訳された。この初版は小八ツ折り版二七九ページ、一四図より成り、多くの医師たちに読まれた。第一版に次いで第二版(一六五二)、第三版(一六七二)、第四版(一六八五)はアムステルダムで、第五版(一七一六)、第六版(一七三九)はライデンで発行された。[2]

この書はトゥルプが二五年以上にわたる自己の医学経験をもとにして、ライデン医科大学を卒業したばかりの息子 Pieter に対する指導書として書きはじめたものである。また第一版から一一年のち、一六五二年に発行された第二版は、増改訂版四巻より成り、第一版発行直後に、早産で亡くなった息子に献呈したといわれる。のちに、ブールハーヴェの門弟であるスイスの生理学者ハーラー Albrecht von Haller(一七〇七―一七七七)はこの書物に、"Golden work"(珠玉作品)の讃辞を呈したほどである。

第三版(一六七二)が出版されたとき、トゥルプは七九歳であったが、その年に、画家フィッシェル Cornelis Visscher (1629~1658) が描いた自分の肖像画を加えた(図3)。肖像の下の添え書きは "Hic ille utrinque Sospitator Tulpius Inserviendo Sanitati et Patrie" で、婿のシックスが書いた称讃の辞「保健と国家の両者への奉仕者トゥルプ」である。また

この版には、七四の医学箴言 Monita medica が付録として付け加えられた。

第四版（一六八五）はトゥルプの死後に出版された。この版は最も稀少なものだといわれているが、講談社の蔵書となった、アメリカ人エバンス博士 Herbert McLean Evans（一八八二―一九七一）の旧蔵古典医学文庫に含まれている。[14] 増補版三八二ページに一九の銅版画があり、扉絵として、フィッシェル作の立派な凹版印刷の珍らしい図を付け、これに次いで、やはりフィッシェル画のトゥルプの肖像画がある（図3）。医学箴言は巻頭に掲載されている。[2]

第五版（一七一六）はライデンの Johannes den Vivie 社より出版され、アムステルダムの医師 A.S. van der Zoort の記載したトゥルプの略伝が加えられた。第六版（一七三九）は医学箴言を含んで三九二ページ、一九図となり、トゥルプへの追悼文や墓銘が掲載された。

Observationes は一六五〇年に、J. Benjamin, 一七四〇年に Juriaan Wishof によって、オランダ語に翻訳された。前者はトゥルプの生存中のものであるが、かれはこの訳が気に入らなかったとみえて、老年期になってから、自分自身で翻訳した。しかしこれは残念ながら、ついに印刷されるまでに至らなかったが、四ツ折り四〇二ページにおよぶその原稿は、女婿シックスによって保存された。ずっとあと一九二八年に、オランダ人 Adrian Scolten によって、この原稿は英訳された。[2]

トゥルプの死後、医学箴言は、パーウの門下のブランカールト Stephan Blankaart（一六五〇―一七〇二）が蘭訳し、ヒポクラテスの箴言 Aphorisms of Hippocrates とともに一書として、一六八〇年に、アムステルダムの Jacob van Royer から出版した。ブランカールトは「武蘭加児」として、杉田玄白らの解体新書にも、その解剖書が引用され、わが国の蘭学でなじみ深い。この書の第二版は、一七一四年にアムステルダムの Timotheus van Hoorn から、第三版はロッテルダムの Hermanus Kentlink から出版された。[2]

トゥルプは Observationes のなかで、約二〇〇の観察例より、多くの医学記事や興味深い臨床例を掲げ、その病理解剖

を重視し、死後の検査と自分の診断を対比検討している。スイス人バウヒン Caspar Jean Bauhin（一五六〇―一六二四）が発見したと云われている回盲弁 Valvula ileocaecalis を、トゥルプは一六三二年に、はじめて詳しく記載図示したので、回盲弁は一名トゥルプ弁 Valvula Tulpii とよばれている。またアセリ Caspare Aselli（一五八一―一六二二）が一六二二年に、犬で発見した乳管 Vasa lactea を人体で発見し、ヒトの乳管について、はじめて記載した。そのほか、二頭奇形、腎結石、膀胱結石、条虫 Diphyllobotrium latum, ジフテリア、気管支の型、脾の搏動、脚気、ヘルペスなどが記されている。

膀胱結石の治療には、しばしば外科的に摘出を要することがある。摘出の方法として、トゥルプは刀、鉤、吸引の三つの方法をあげた。Garrison, Major[15] によれば、脚気はトゥルプより以前に、ボンチウス Jacobus Bontius（一五九二―一六三一）が東インドで経験した。ボンチウスの死後、弟の William の出版した著書 De Medicina Indorum, Leiden, 1642 によって、脚気がはじめてヨーロッパに紹介された。"Beri-beri" という脚気の病名は、原地人の名付けたもので、跛行の意だという。ボンチウスに次いで、トゥルプが一六五二年に、Observationes medicae（第二版）に、脚気について記載した。トゥルプのみた脚気患者は、東インドからオランダに帰国した人で、トゥルプは神経と筋肉が侵されるその症状を詳しく記載した。なおここに記したボンチウスは、先に記したトゥルプの師 Reiner Bontius とは別人である。

Beswick[17] によれば、「ヘルペス」の語は、トゥルプがはじめて "Exedeus praecordiorum herpes" という語で記載したが、これはおそらく、帯状疱疹 Herpes zoster のことで、皮膚とともに皮下組織も侵され、皮下組織はとくに大きな影響を受けないと解説している。Rickham[18] はトゥルプが命名した "Spina bifida" の嚢内の神経分枝の存在を引用し図示した。本奇形は、ヒポクラテス以来知られているが、トゥルプはその六例を経験し、これを詳しく記載した。

頭部外傷の解剖の結果、損傷の反対側に生前麻ひの現われていたことを確かめたが、その理由を解くことはできなかったという。神経の交叉によって、脳の病巣と反対側の麻ひの現われることは、すでにギリシア人 Cappadocia のアレテウ

ス Aretaeus, Aretaios, Arétée（一二〇—二〇〇?）が記載している。[15][19] アレテウスの名は六世紀以前にはあまり知られず、その伝ははっきりしていない。しかし、かれのギリシア語の医学著述は、一五五四年に、フランスのアンリ二世によって、はじめてパリで出版され、のちにブールハーヴェがアレテウスの業績を「医学の金字塔」と賞讃したほど立派なものであった。トゥルプをはじめ同時代の医師たちがアレテウスの業績に気付かなかったことは惜しまれる。相沢・堀江[20]によれば、脳卒中の最初の病理解剖はウェッペル J.J. Wepfer（一六二〇—一六九五）によって行なわれ、半身不随がその反対側の脳出血によって起ることは G.B. Morgagni（一六八二—一七七一）によって証明されたというから、トゥルプの時代より後のことである。

トゥルプはまた比較解剖の見地から、それまでの学者が用いなかった類人猿チンパンジーを選んで解剖を行ない、これが人類に似ていることを証明した。

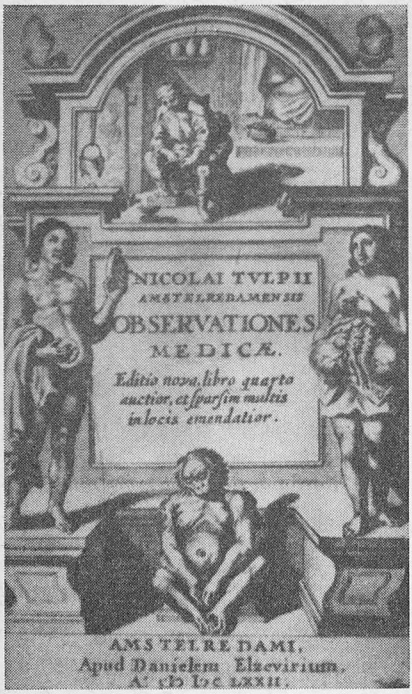


図 5
Observationes Medicae の扉画
(Hahn-Dumaitre より)

Observationes Medicae の扉画は画家フイッシェルによって描かれ、大きさは一三〇×七六 mm で非常に珍しい図案である（図5）。Hahn-Dumaitre[9] によって解説してみよう。下の方には、比較解剖の見地から、類人猿が描かれているが、この種の書物では、はじめての試みであろう。書名表示部の左縁外側には、腹水になやむ男子が、その右手にまるい器具を持ち、臍の高さで腹部を圧迫し、腹水を流し出している。左手

にも同じ器具を持っているが、この器具は著者によって“Penicillum lignеum”とよばれ、「木の筆」という意味だが、針のように刺すものと想像される。ページの右側には、腹部を切り開かれている婦人の像が描かれ、大きな二ケの腫瘍、おそらくは卵巣嚢腫がみられる。

Tyssen[2]によれば、この扉画の上部の図はJan de Dootという鉄工で、年齢の記載がないが、膀胱結石の患者である。すでに二回外科医の手術を受けたが、結石の摘出に成功せず、苦痛になやんでいた。第三回目の手術をすすめられたが、これを断り、何とかして自分で処理しようと決心した。或る日かれは妻を魚市場に行かせて魚調理用の刀を持参させ、それで結石の摘出を試みた。弟に局所を剃毛させたのち、後から介補させて、画のように腰をおろした。自分の左手で外から結石をおさえ、右手に持った刀によって石が採り出せるよう創を作り、これを手で拡げながら少しずつ結石を創外に押し出した。摘出に成功したあと、医師を呼んで創を縫合させて治療を続け、間もなく全快にこぎつけたという珍しい症例である。結石は鶏卵より大きく、重さが四オンスあり、摘出に用いた刀とともに描き残されている[8]（図6）。

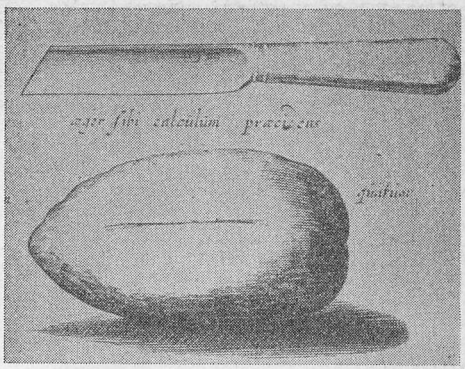


図 6
Jan de Dootが自分で摘出した膀胱結石と摘出に用いた刀（Lindeboomより）

トゥルプは解剖学の業績ばかりでなく、自己の植物学の知識を生かして、オランダではじめての薬局方Dispensatorium, Winkelboek, Pharmacopoea Amstelredamensis（一六三六）を出版した。その前の年、一六三五年に、アムステルダムではペストが流行して、一七、一九三名の患者が発生し、二—三、〇〇〇名がわずか一週間に死亡した。トゥルプはそのとき、一般の薬剤の使用法が混乱していることを認め、医師の処方による適正な投薬の必要性を痛感した。そこで当時の

有能な六名の医師を集め、この件について対策を計った結果、至急薬局法を作ることとなった。翌一六三六年四月に、前記アムステルダム薬局法が完成し、一六三七年には、大部分の薬剤師が、この薬局法に記載された薬を、医師の処方によって使用することに賛成したという。(2)

トゥルプは終生、医学や科学の著述と翻訳などを続けたが、医学的記載には、用語として自国語を用いることに反対し、すべての医師は国際語であるラテン語を学び、ラテン語で書いて、外国の医師にも読んでもらうべきであり、自国語による書物は、通俗的一般向けのものに限ると主張し続けた。

（次号へ続く）

記紀神話と医療（上）

新村　拓

日本医史学雑誌第二十四巻三号
昭和五十三年七月三十日発行
昭和五十三年二月四日受付

神話の原初的形態は弥生時代以降の農業共同体における豊作祈願を中心とした祭りの場において語られ、うけつがれて成立したものであり、素朴で呪的象徴的内容に富むものであったと思われる。しかし、政治的な統合がすすむにつれ、各共同体が所有していた神話は現実の支配従属の政治形態に対応する形で、神話の統合、体系化が進行し、現実の支配関係の正当性を保証するものへと変わっていったのである。それとともに各共同体が行っていた祭は上級支配層のもとへ結集され、更には大和朝廷の大王のもとへ統合され、忌部、中臣ら宮廷祭官によって全国的祭祀権の統轄へとすすむが、その政治的服属の過程で大王家の神を中心に中央地方豪族、また各共同体の神々はいわゆる高天原系の天津神、そして国津神の分類のもとに序列化され、現実の政治社会の序列が神話の世界に反映される形で神々の系譜がつくられていったのである。このようにしてつくられた宮廷神話は大王家の宗教的権威の背景をなすものであり、国造層による服属儀礼の場において語られる神話は現実の王権を強化するものであった。しかし、律令国家における中央集権的政治組織の確立は神話のもつ政治的な機能を弱めることになり、記紀神話は中央貴族の地方豪族に対する優越性を宗教的精神的に保証する機能をもつにすぎなくなってしまったのである。(1)

記紀神話の成立過程が示すように、神話はきわめて政治性の濃いものであり、天皇家が行う祭祀儀礼の説明ともなって

いるが、他面その基盤ははじめに述べたように農業共同体における豊作祈願、収穫感謝、虫送り等の農耕儀礼を中心に、道饗祭、鎮魂祭にみるような防疫治病など日常性を備えたものであり、特に出雲神話においては土俗的な伝承をみることができる。そうした神話のもつ政治性、宗教性、日常性の諸相のなかで医療がそれぞれにおいてどう位置づけられているか、人間が死という厳粛な現実からのがれられない限り死を見つめる病い、そして医療の問題は個人にとって、また社会にとって何らかの形で対応を迫られる課題であるといえる。以下は神話における医療のもつ意味を考えようとするものである。

（一）

原始共同体社会は生産力の発展が生みだす剰余生産物および労働用具の私的所有によって崩壊するが、[2]その過程で共同体成員間の階層分化と特定家族集団による首長の世襲がみられるようになる。この支配集団は集団的労働の統率と鉄製農工具の生産と交流の独占、および豊作をもたらし災厄を避けるための農耕関係の祭祀の統制を行ったとみられる。[3]そして首長が神と共同体との媒体の役割を果たすと考えられるにいたった事態を基盤として、神性を付与された首長の霊を共同体の守護霊としてまつる葬祭儀礼が発達するが、[4]古墳は集団祭祀の場として考えられ、古墳に副葬される鏡、玉類剣等の品は被葬者の魂を鎮めて霊魂の荒びを防ぐ鎮魂呪具であるとともに、首長霊の霊力を表現する依代として、他界からくる首長霊によって再生産と支配を安定させる機能をもつものと考えられていた。[5]そして多くの銅鐸が一ヶ所から出土している例にみられるように、次第に共同体祭祀は統合され、神宝器の伝世が首長権を保証する時代は終わり、祭祀圏を統轄する大王による首長権の確認が服属儀礼を通して行われるようになり、[6]記紀神話の原型が形づくられたのである。

地方的祭祀および神話を担ったのは県主や国造であったが、彼らは朝廷の命を受け祭祀を執り行うが、彼らの奉ずる神は国魂神であり、それは彼らが地方族長として支配圏を拡大する過程で土着神を統合していったものである。肥前国風土記佐嘉郡の条によれば、佐嘉川の上流に荒ぶる神あり、往来の人の半ばを生かし、半ばを殺していた。そこで県主等の祖

大荒田が卜占したところ、土蜘蛛の大山田女と狭山田女という二女性が土人形、馬形をもってこの神をまつればよいとの神意を得、大荒田はそれに従ったところ神は和らいだとある。また筑後風土記逸文にも同様な内容をもつ伝承があり、筑紫君等の祖甕依姫を祝として祭ったところ荒ぶる神は和らいだとある。これらは共同体が県主的族長への抵抗むなしく包摂されていった史実の神話的表現とみることができるが、県主的族長は祭祀権の統合という形で政治的支配を確立したのである。そして巫祝的祭祀集団を統轄し、古事記仲哀天皇条の国之大祓にみられるような祭祀儀礼を執行することによって、県主国造的族長層の支配権は安定したものとなったのである。

もともと祭巫と医術とは不可分なものとして存在していたのであり、県主国造を介して、または中臣や忌部等らの祭祀伴造らによって行われた呪術宗教的機能の全国的統轄はそのまま呪的医療機能の統轄をも意味するものとなり、のちに内廷医療機関の形成に深くかかわるものとなるのである。漢書高帝紀六年条の都に祠祀官女巫を置き全国の県里の巫を統轄し、同書列伝晁錯伝の里に医巫を置き以て疾病を救い以て祭祀を修むとある史実はわが国の呪術宗教的機能の全国的統轄の過程のなかにみた呪医的機能の統轄の様相を思わせるものである。

社会統制の制度的な表現をみない社会においては共同体首長が社会秩序を維持していく上において、呪術宗教的な職能が統治能力を補完するものとなっていたことは邪馬台国の卑弥呼にみる通りである。[7] 呪能をそなえた人間としての首長はまた治病に対しても期待されうる存在でなければならなかったのである。そのことは書紀巻一の一書に「大己貴の命、少彦名の命と力をあはせ心を一つにして天の下を経営り、復顕見しき蒼生と畜産との為にその病を療むる方を定め、また鳥獣、昆虫の災を攘はむが為には、その禁厭の法を定めき。この以に百姓今に至るまでに咸恩頼を蒙れり」と、大己貴命と少彦名命が人民のために療病方と禁厭法を定めたとあるはまさに首長にとって治病が重要な職能であったことを示している。この大己貴命はまた多くの名をもつことでも知られているが、大国主神の名で登場する著名なものに因幡の白兎の話がある。ワニザメをたぶらかしたために丸裸にされた兎が命によって助けられるというもので、これは兄弟の八十神と因

幡の八上比売を争う求婚譚として語られているものである。八十神は兎に対して「海塩を浴みて風に当りて伏せれ」と教え、命は「水門に往きて水を以て汝が身を洗ひて、即ち其の水門の蒲黄を取りて敷き散らして其の上に輾転」することを教え全治させている。八十神の治療が消毒効果を期待するという意味においてでたらめであったわけではなく、それは治療の不完全さを示すものといえる。他方、命の方は真水で洗滌したのちに治血消炎効果をもつ蒲黄を塗布し[8]、全治させているわけだから彼の治療は完全であったわけである。命はここに完全な治療法を心得ていたという点で八十神よりすぐれ、その結果、八上比売を獲得することができたのである。この古事記にみる因幡の白兎の話は本来、大国主神の神話とは関係のないもので、いわゆる民間療法を伝える説話を取り込むことによって神話にふくらみをもたせるとともに、治病にすぐれた首長族長としてのイメージを強く印象づける効果をもたせたものといえよう。この話につづく命の苦難は成年式、または族長の即位式にともなう試練と考えられているものである。そのはじめは八十神の怒りにより命は焼死するが、神産巣日之命から遣されたキサカヒヒメとウムカヒヒメの両神によって赤貝、蛤具の粉末に母乳をまぜたものを塗布され、蘇生するという話がある。両神は出雲国風土記の嶋根郡加賀郷、法吉郷にみられるところからこの火傷の治療法は出雲地方に伝わる民間療法のひとつであったと思われる。命の火傷が出雲の一地方の神によって療されるという話はまた別の角度からみるならば、首長族長の資格条件のひとつである治病の職能が次第に補佐集団に移行ないしは補完されるようになったことを示すものといえる。治病が首長族長に期待されたのは生産力の低い社会にあっては病人の出現が協業の上に成り立つ共同体そのものの崩壊を導くものとなり、病気への対処が生産と共同体秩序の維持にとって根源的な問題としてとらえられていたからにほかならない。そして首長の呪医的職能というものは共同体成員の呪力に対する信頼によって支えられているものであるから、治病行為の失敗は呪力と呪能者への信頼の喪失をもたらし、首長による共同体支配の基盤を揺がすことになるわけで、そこにおいて首長は新たな解釈に基づく呪を採用し、失敗の合理化昇華をはかるとともに、次第にこれまで主として象徴的な呪的演劇行為に依存していた治病行為を経験技術的な方法を大幅に取り入れたものへと変え

ざるを得なくなる。このような過程のなかで経験技術的な医療手段は首長によって保護され開発されることになり、この新たな動きを支えるために共同体成員のなかから有能なものたちが取り込まれ、首長の呪医的職能における補佐集団を形成することになる。前の神話はこうした歴史的過程を示すものとみることができる。なお印欧語族の神の機能分類からいって医療は第三機能にあたり、古代神の主要な機能とみられないという考えもあるが、[9] のちにのべるように病気への対処は個人のみならず社会にとってもきわめて切実なことであり、治病を神あるいは王の重要な職能として位置づけられていたとみることができる。しかし医療機能は早期に王の手を離れ、補佐集団に移行したと考えられるから、王の主管する職能のなかでの医療は次第に影のうすいものになっていったであろうことは否定できない。

大己貴（大国主）と少彦名の両命がもつ医療神という性格は、[10] 共同体首長に期待された治病職能の投映であるとみることができ、それは国の呪的宗教機能を管掌した県主国造による「国之大祓」につながるものである。[11] 全国に両命の名を負う神社は多く、特に伊予、伊豆国風土記逸文温泉の条に「いにしへ天孫、未だ降りまざりし時に、大己貴と少彦名の二神、我が秋津洲の民の夭折することを憫み、始めて禁薬と温泉の術とを制めたまいき」とみえるごとく、医療効果の期待される温泉地帯にある古社に両命を祀っているのがみられる。[12] このような信仰の広がりは医療のもつ重要かつ普遍的な性格によるところが大きいが、他方、両命を宣布する集団の存在をも考えなければならないであろう。大己貴（大国主）命は須佐之男命の子とされているが、その系譜関係には異伝があり、後世的に結びつけられたものであることを示している。[13] 水野氏によれば須佐の語源は巫覡の居住地の意味を有する語であり、須佐之男は巫覡的英雄神であり、新羅系の客神であるという。そして出雲国飯石郡須佐を本貫とするこの神を斎く集団が大穴持（大己貴）命を斎く出雲国造家によって統合され、大穴持命が須佐之命の御子である姫神を妻覓ぎして姻戚関係を結んだことによって、両神統は伝説史的に結合させられたと考えておられる。[14] 須佐之男の子である大己貴命を祭神とする神社の分布の広がりは松前、青木両氏によれば、出雲系の巫祝の徒が諸所の地方的な神々の中に入り込み、これを出雲化した結果によるものであり、高天原系の皇祖神に対抗

する勢力を形成するに至って、大国主命による国譲りという形で政治的解決をはかられたものであろうとしている。[15] 要するに両命、特に大己貴信仰の広がりの背景としては医療機能という性格と命を宣布するところの出雲系巫覡集団の存在が考えられるということである。

共同体首長族長にとって治病の職能が重要なもののひとつと考えられていたことの神話的表現として大己貴、少彦名両命の療病禁厭方を考えたのであるが、歴史的事実としての大和朝廷の大王においては在地巫祝集団を統轄し祭祀を行う国造や県主を支配するという形で、または朝廷が直接に呪的宗教的集団を部として設定するという形で、大王の呪医的権能者統轄者としての地位が形成されたのである。書紀仲哀天皇八年正月条の倭国菟田人伊賀彦や同崇神天皇七年八月条の大田田根子命、市磯長尾市、また新撰姓氏録和泉国神別巫部連にみえる筑紫豊国奇巫などは国造県主ら族長層の呪的宗教的機能を支える在地巫医的集団であったと思われ、彼ら呪能者はいろいろな形で大和朝廷に奉仕吸収され、大王の治病職能における補佐集団を形作られたのである。

（二）

記紀にみえるいわゆる最古の病的現象の記録としては伊邪那岐、伊邪那美二神の神婚による水蛭子（蛭児）、淡島の誕生である。水蛭子は葦船（天の磐樟船）に入れて流しすてられ、淡島も子の例には入らずと記されている。両児については諸説があって定まらないが、不具未熟児であったとみられる。この児が生まれたのは女神の方が先に愛をつげたからであるとしているが、これは明らかに男尊女卑的な儒教倫理の教養をもつ律令官人による編纂の結果である。この種の神話の原型は南方諸国に広くみられ、原初的には太陽神的な霊格であり、海人族によって伝承されていたものが宮廷に入ったもので、もともとは近親相姦や異常出産による不具児の誕生とその流棄の社会的な風習を神話化したものとみるのが自然であろう。[16] 奇型不具者は生産力の低い段階にあっては共同体にとって大きな負担となるものであり、多くの場合、このように葬り去られてしまったものと思われる。しかし、これとは逆に奇型不具者が崇拝されるという一面も神話には存在す

る。[17] だが、これについては原則的にはその奇型自体が有用なもの、例えば応神天皇（大鞆和気命）の上膊の破格筋は弓術にとって優位な肉体的奇型である、または奇型不具であっても社会にとって不利益とならないもの、例えば久延毘古（案山子）は「足は行かねども天下の事を盡に知れる神になもありける」とあり、足萎であっても有能な働きをしているなど、不利益をもたらさない場合に成立するのであってすべての奇型不具が神格化されたものではなかったことは、水蛭子が水葬に付されたことや淡島の扱いにみる通りであり、更には垂仁記においては旅立ちに跛盲の者に出会うのは不吉とされる思想がのべられ、のちの記になるが推古二十年条には「其の面身、皆斑白なり、若しくは白癩有る者か、其の人に異なることを悪みて海中の嶋に棄てむとす」とあって、常人と異なる容姿の者を嫌うなどむしろ奇型の神格化を否定する傾向にある。

それならばこうした不具、そして病人を忌み嫌う思想とは何であろうか。生産力の低い社会であればあるほど共同体成員の被る負担は大きなものであったことは事実であるが、しかしそれだけでは忌み嫌うまでには至らない。そのことを考えるには天津、国津罪の問題をとりあげるのがよいであろう。

両罪は周知のように延喜式祝詞の大祓詞、皇大神宮儀式帳および古語拾遺にみえるものだが、その原型は古事記仲哀天皇条の「国之大祓」、更には天津罪の原型として須佐之男の高天原での所業があり、それらが整理統合されてできたものである。大祓詞による天津罪としては畔放以下八つの諸行為が列挙されているが、細かな問題は別としてこれらは農耕生活に対する侵害行為か、あるいは祭の行事に対する侵害行為を意味するものであり、他方、国津罪については生膚断以下十四の諸行為があげられ、約すれば殺傷罪、近親相姦、呪詛、天災となるであろう。[18] ここで問題とするのは国津罪中の白人、胡久美である。白人は推古二十年条にみえる面身の斑白なる者、または白癩、白子の類をいうのであろう。胡久美は古事記仲哀天皇条にみえる「御腕に鞆如せる宍生りし故」に大鞆和気命と御名がつけられた如き寄肉、こぶの類をいうものと思われる。これら人体の疾患、奇型と思われるものが罪としてとらえられているところに特異性があるといえる（な

お、儀式帳によれば川入という溺死や火焼といった疾患が国津罪としてあげられている)。大林氏によれば天津罪とは天津神ないしその子孫が一段下の国津神の機能に属する農耕などの生産活動について犯罪をおかすことであり、国津罪とは国津神ないし国の中の人民がそれより一段下のレベルの雑神や自然のレベルにまで身をおとして禽獣に等しい所業を行い、あるいは鳥獣の害をうけることであって、罪とは聖なる秩序に対する犯罪、宇宙の均衡破壊をいうとしている。(19) このような考え方にたつならば疾患奇型は社会的基準から逸脱した状態であり、社会的に期待された役割を遂行する能力がそこなわれ、共同体秩序にとってマイナスの作用を及ぼす状態ということになろう。そして何が健康であり、病気であるかということは共同体成員の共通意志にもとづき、最終的には共同体首長の宗教的政治的判断によって決められることである。また白人、胡久美につづき昆虫之災、高津神之災、高津鳥災といういずれも天災と考えられるものが国津罪として数えあげられているが、これ等は農災害だけではなく、鳥獣虫などによって人体に危害を加えられ、損傷をうけたことをも意味するものと解するならば、前者の疾患と同様な思考から罪の範疇に入れられたものとみることができる。

ところで、これらは前にふれた大己貴と少彦名による「蒼生と畜産との為にその病を療むる方を定め、また鳥獣、昆虫の災を攘はむが為にはその禁厭の法を定めき」とある療病方と禁厭法の対象に正に対応するものであるといえる。ここで罪とされているものは生産と共同体秩序の維持にとって障害となるものであり、それ故に忌むべきもの罪と意識されたわけで、この罪を取り除く能力、即ち療病禁厭の法にすぐれていることが首長たる資格条件のひとつになった。従って農業社会の進展とともに宗教的に整えられた国家的な祭祀儀礼の場において、祭祀権を掌握する王が神前においてあげさせる祓詞のなかに病気および天災のことが含まれているのは、王がかつて農業共同体の首長の時代において療病禁厭のことを職務のひとつとしていたことと関連するのであって歴史的な痕跡というべきものである。

注

(1) 岡田精司「古代における宗教統制と神祇宮司」歴史学研究『歴史における国家権力と人民闘争』所収、一九七〇年

(2) 縄文後晩期にあらわれる多様な禁忌呪術―抜歯、土偶、土版等は共同体内の小集団の自立化を抑制する一定の役割を果たすものであったが（都出比呂志「農業共同体と首長権」講座日本史Ⅰ所収）、ここで縄文土偶は死と再生をあらわすと思われる意識的な損壊の痕跡をもち、独特な目のまわりの線刻のくまどりは僻邪視を示し、いずれも原始シャーマンの特徴をかねそなえるものと考えられているが（山上伊豆母「巫女の歴史」一三～一六頁、佐野大和「日本の古代文化」九五～九八頁）、もとは王の呪医的職能に利用されたものではなかったか。王のそうした職能というものは共同体成員の呪力に対する信頼によって支えられているものであるから、治病行為の失敗は呪力と呪能者への信頼を喪失させ、かつては殺されるか、その地位を追われなければならなかった。そうしたなかで王の共同体支配の安定をはかるために生み出されたのが土偶による王の呪医的機能の代替であり、治病行為の失敗は土偶の損壊と棄却によって完済されるようになったと考えられる。なお山上氏によれば倭人伝の持衰と土偶を原始シャーマンたる占巫とその人形であると解している。

(3) 原島礼二「日本古代社会の基礎構造」六六～七三頁

(4) 近藤義郎「古墳発生をめぐる諸問題」「弥生文化の発達と社会関係の変化」日本の考古学Ⅲ、Ⅴ所収

(5) 原島前書、一三八～一四〇頁

(6) 小林行雄「古墳の話」六〇～六三頁

(7) 拙論「令制医療体制の形成過程について」医学史研究、第四八号、拙論「古代医療官人制の基礎的考察」日本歴史、第三五一号

(8) なお蒲黄の穂と兎毛との類似からくる類感呪術による呪的医療の意味を併せもつものであろう。西郷信綱「古事記の世界」九三～九四頁によれば、八十神は兎に対しデタラメを教え、大己貴は真の療法を教えたとしている。

(9) 大林太良「日本神話の構造」一二六～一五〇頁、伊藤清司編「シンポジウム出雲神話」一三四～一三七頁

(10) 少彦名については古事記仲哀天皇条の酒楽歌「此の御酒はわが御酒ならず、くしの神、常世にいます石立す少名御神の神寿ぎ、寿ぎくるほし豊寿ぎ寿ぎもとほし献り来し御酒ぞ、あさず食せささ」にもみえるが、くしの神とは奇神であり、酒神、薬神に通ずるものと解される。なお常陸国においては少彦名は早くに薬師菩薩と習合しており（三谷栄一「常陸国風土記から習合思想へ」国学院雑誌、昭和三八年五、六月号）、それは少彦名の医神としての性格を前提とするものである。

(11) 石母田正「日本古代国家論」第一部、一七〇～一七一頁

(12) 青木紀元「日本神話の基礎的研究」一四七～一四九頁、松前健「日本神話の形成」二三八～二三九頁

(13) 松前前書、二六四頁

(14) 水野　祐「出雲神話」二五四～二六四頁
(15) 松前前書、二九七～三〇六頁、青木前書、一四七～一四九頁
(16) 岡田精司「古代王権の祭祀と神話」二一八～二二一頁、次田真幸「水蛭子と葦船」国文、第一七号
(17) 石原　明「日本生理学前史」明治前日本医学史、第二巻所収、七～八頁
(18) 石尾芳久「天津罪国津罪論考」日本古代法の研究所収、井上光貞「古典における罪と制裁」日本古代国家の研究所収、石母田正「古代法」日本古代国家論、第一部所収
(19) 大林前書、六三～六四頁

The Myths of Kojiki and Nihon-shoki, and Medicine (Part 1)

by
Taku SHIMMURA

This thesis discusses how medicine is considered in the myths of Kojiki and Nihon-shoki. These myths perform the function of consolidating the submission of various clans to the Yamato Dynasty by the Dynasty's monopoly of all the rituals including the remedial treatment of diseases which is one of the most important duties of the chief of each community, and they also exercise the function of justifying the validity of the Yamato Dynasty through the establishment of religious relationship between the Emperor and each clan.

The treatment of diseases was expected of the chief of each community mainly because successful coping with disease was considered to be indispensable to the maintenance of the order of the community and its productive activity; if someone in a certain community fell ill, it would lead to the collapse of the whole commutity which was sustained by the cooperation of each member.

日本医史学雑誌第二十四巻三号
昭和五十三年七月三十日発行　昭和五十二年九月十九日受付

本土に最初に麻酔を伝えた島津藩医伊佐敷道興について

松木明知

1　はじめに

華岡青洲による最初の全身麻酔下の乳癌の手術が施行されたのは文化元年（一八〇四）十月十三日であった。手術を受けたのは大和五条村　藍屋利兵衛の母かんであるが、その歿年月日が五条市講御堂寺の過去帳に文化二年（一八〇五）二月二十六日と記されていることから、従来の説より一年前に手術が行われていたことが判明した。[1]～[5]

しかしこれより一一五年も前の元禄二年（一六八九）に麻酔術が高嶺徳明によって中国から琉球へ、そして伊佐敷道興によって薩摩へ伝えられたことは余り知られていない。

2　高嶺徳明による麻酔下兎唇手術の伝来

高嶺徳明[6][7]、字は魏士哲は承応二年（一六五三）二月十五日琉球の首里（那覇市）に生れた。十一歳の時紫金大夫金正春らに随って清の福州南台へ渡り同所に三年間滞留し、この間中国語を習得した。寛文六年（一六六六）一旦帰国したが、元禄元年（一六八八）三十六歳の時、毛起竜らが清に進貢した際徳明は通辞として一行に随伴した。

偶々一行の一人が黄会友なる人物に兎唇の手術を受け創痕を留めなかった。当時の琉球王尚貞の孫尚益は兎唇であり、不具者が王位を継承することは大問題となっていた。そこで朝貢団一行は中国語の達者な徳明に補唇の術を学ぶことを命じた。

黄会友は先祖伝来の秘方であるためと称して伝授を固辞したが、徳明は一国の命運にもかかる事態であり、異国に伝える故と懇願し、漸くのことで黄会友から全身麻酔下の兎唇手術の秘方を伝授された。二十日間昼夜寝食を忘れ、実地にこれを学びさらに秘伝書一巻を授けられたという。

徳明は元禄二年（一六八九）五月二十日琉球に帰ったが、秘方をもって八月には大里間切島袋の男一人、国間切嶺井村の女一人の兎唇を完治せしめ、さらに名嘉間親方の男孫一人、豊見城間切平良村の男一人、中城御殿の玉城あらむしられ（女官）姪一人の手術に成功した。これで徳明の技術も容認され、元禄二年（一六八九）十一月二十日、王孫尚益の欠唇の手術が行われ、術後も経過良好で、手術創は痕跡を留めなかったという。

3　伊佐敷道興への伝授

島津藩は首里に奉行所を設けて琉球を支配していた。徳明の手術のことを聞いた当時の在藩奉行村尾源左衛門[8]（在任期間元禄二年三月二十六日～四年七月十八日）は元禄三年九月徳明を奉行所に呼び、面前で大里間切与那原村の男一人の兎唇の手術を命じた。徳明の技術に驚嘆した源左衛門の命により、奉行所付の医師伊佐敷道興は徳明からその奥義を学びかつ秘伝書一巻を授けられた。さらに徳明は奉行にも一巻を献じたという。これらの秘伝書は散佚して今に伝わっていないのは洵に残念である。徳明はその後正徳四年（一七一四）地元の医師豊氏元達、桑氏良心の両人にその秘方を伝授したという。

4　伊佐敷道興について

徳明から最初に秘方を伝授された島津藩医伊佐敷道興についてはこれまでほとんど知られるところがなかった。

偶々沖縄復帰の際、沖縄の医学事情を調査した鹿児島大学医学部の佐藤八郎教授[9]が、伊佐敷家の塋域を調査し「享保十五年、庚戌十月十一日、徳本道興庵主」と刻された墓碑により、伊佐敷道興が現在鹿児島市西千石町で眼科医院を開業されておられる伊佐敷康政博士の先祖に当ることを発見した。しかし博士の手許には何ら関係資料などは残されていない。

筆者は昭和五十二年五月鹿児島市に伊佐敷博士を尋ね種々お話を賜わり、改めて同家の塋域を調査した。昭和四十七年九月笑岳寺墓地から移転したものであるが、移転前二十四基あった墓碑も現在は整理されて八基のみになっており、その中の二基が甚だ重要である。一基は佐藤教授が発見されたもので碑正面に前述の如く「享保十五年庚戌十月十一日　徳本道興庵主」向って左側面に「伊佐敷道興直安」と記されている。道興自身の墓である。他の一基は高さ約三尺の六角形の碑柱であるが、風打雨蝕のため殆んど文字の解説は不能である。伊佐敷博士もこれがだれの墓であるか分らなかったが、筆者は碑の後面の文字を「享保五年庚子天二月彼岸日願主伊佐敷道興直安」と解読した。これによりこの碑が伊佐敷家の先祖代々のもので、道興がその歿する十年前に建立したものであることが判明した。道興の妻は名は不詳である、天明七年（一七八七）十一月十日七十三歳で歿している。

極く最近伊佐敷博士は同家の古い系図を入手された。それによると初代忠豊が佐多の伊佐敷に領地を賜って以来伊佐敷姓を名乗ったという。道興は幼名金千代、初め久愷（ひさやす）と称し、直安と号した。入道名が道興である。寛文元年（一六六一）三月二十九日に生れたが、母は田之上八兵衛綱伴の娘であった。道興は実は山之内考右衛門重貞の嫡子であった。伊佐敷久種が延宝八年（一六八〇）に歿したが、その実子久貞・久両は未だ幼なかった。そのため道興を養子に迎えて後嗣としたのであった。時に道興は十九歳であった。系図に従えば初代忠豊から数えて十三代目である。道興は享保十

五年（一七三〇）十月十一日に六十九歳で歿したが、医学の師などの詳細な経歴は知られていない。また道興と現在の伊佐敷博士までの凡そ二十代の系譜についても詳しくは知られていない。

徳明[11]から兎唇の手術の秘方が伝授されたのは元禄三年（一六九〇）、道興が三十歳の時であったが、彼が鹿児島へ帰った正確な期間についても分明でない。また現在のところ道興が鹿児島で実際に麻酔下に手術を行ったという記録もない。しかし日ならずして行われたことは容易に想像し得ることであり、今後元禄年間の島津藩のこの点を検索すれば、これに関連した記事が見出されるかもしれない。これについては後日に期したい。

5　おわりに

いずれにせよ青洲より一一五年も前に麻酔法が中国からわが国に伝来し、実際に琉球で手術が行われていたことは驚くべきことである。

黄会友の麻酔法がいかなるものであったかは不明であるが、所謂華佗の麻沸湯の系統に属するものであろう。青洲の通仙散も根本的にはほぼ同一の系統に属する。将来高嶺徳明―伊佐敷道興―華岡青洲を結ぶ何らかの手懸りが発見されるかもしれない。

擱筆するに際して、塋域の調査を許可され、かつまた貴重な古系図の複写を御恵与下さった、鹿児島市西千石町の伊佐敷康政博士に深甚の謝意を表する。

文　献

(1)　松木明知　華岡青洲と藍屋利兵衛の母　日本医事新報　二四六七号　昭和四六年八月七日
(2)　松木明知　華岡青洲と最初の全麻下乳癌手術の期日　麻酔二一巻　三〇〇頁、昭和四七年三月

(3) 松木明知　華岡青洲による最初の全身麻酔の期日について　日本医史学雑誌　第一九巻　一九三頁　昭和四八年六月
(4) Matsuki, A.: Seishu Hanaoka, a Japanese Pioneer in Anesthesia. Anesthesiology 32: 446, 1970
(5) Matsuki, A.: The Correct Date of The First General Anesthsia by S. Hanaoka. Anesthesiology 39: 565, 1973
(6) 東恩納寛惇　高嶺徳明—琉球における全身麻酔外科手術の創始者　医譚複刊一八　一七八九　昭和三三年
(7) 金城清松　琉球医学史概説　医譚複刊　二八　二一一七頁　昭和三八年
(8) 鹿児島県資料　旧記雑録追録(1)　手紙二一八〇　昭和四六年　鹿児島県立図書館蔵
(9) 佐藤八郎　この人を忘れてはならない—高嶺徳明（魏士哲）のこと　鹿児島県医師会報　昭和四七年六月一日
(10) 伊佐敷家古系図　明治三年庚午閏十月二四日　伊佐敷康政博士蔵
(11) 森　重考　「薩摩医人群像」（昭和五一年）によれば、道興は高嶺に二年間学んだとあるが何ら実証がない

On Doko Izashiki, Japanese Pioneer of Anesthesia at the End of 17th Century

by
Akitomo MATSUKI

Seishu Hanaoka was believed to have been the first to give anesthetics for surgery in 1804 in Japan.

Recent investigations, however, have revealed that Tokumei Takamine of Ryukyu went to China and learned the practical technique of general anesthesia and surgical technique for hare lip, then came back to Ryukyu in 1689, where Doko Izashiki learned the techniques from him in 1690. Within the following several years Izashiki returned to Kagoshima at the order of the Shimazu feudal clan.

Yasumasa Izashiki M.D. of Kagoshima, an ophthalmologist, is a descendant of Doko Izashiki. Recently he obtained an old family record of Izashiki's. According to it, Doko Izashiki was born on March 29, 1661, as a son of ko-emon Yamanouchi. At the age of 19, Doko entered Izashiki's family as an adopted son. He died on October 1st, 1730.

In Izashiki's cemetary, there are eight tombstone. Two of them are important. The one is the grave stone of Doko Izashiki and the other is of his ancestors, which was made by Doko Izashiki in 1920.

So far we don't have any document substantiating that Doko Izashiki performed a surgical operation for hare lip under general anesthesia, but he is the first to bring the technique of general anesthesia and surgery for hare lip into Japan proper.

「瘍医新書」の研究（四）

大鳥蘭三郎

日本医史学雑誌第二十四巻三号
昭和五十三年七月三十日発行
昭和五十三年三月十八日受付

16

原書の第七節の大意はつぎの通りである。

「その後カルデア人とエジプト人は、古代の歴史が示すところでは外科術をさらに一層発展せしめ、ついに、その後、ギリシア人によってさらに大きく完成されるに至った。その間アポロやその息子のエスキュラピウス、さらにはマカオン、ポダリリウス、シロン、ケンタウルス等が盛名を博するに至り、その内の二、三の者は、その巧妙さの故を以て神に祭られている。最後にエスクルピウスの家系から出たヒポクラテスは先人達の知識を互いに集大成し、それを彼の聡明な判断と解剖学的熟練とによってより善くし、そうして多くの有益なことを我々にその著書（外科学の最古のものである）のうちに残している。その後ギリシア人から比較的善い状態でローマ人へ伝えられた外科術は、両国民が協力して一層完全なものとし、ヒポクラテス後、古き順に、セルズス、ガレヌス、パウルス、エギネタ、アエティウス、オリバシウスらが最も有名で、それ等のある者はキリスト生誕後間もなく生まれ、その著書をわれわれにのこしている。（E）しかし、無学が支配し始めた時から数百年の間はすべての学問、芸術は廃絶してしまい、外科術もまた何百年の間にひどく荒廃し、

改良されることはほとんどなく、すでに知られていたことも再び忘れられてしまった。但しアヴィセンナやアルブカシスのようなアラビア人は光彩を放ち、外科術をいく分行い、またいくらか明るくした、その後さらに十五世紀とそのつぎの世紀に至ると、ヨーロッパにおけるあらゆる学問は再びその頭をもち上げはじめた。その間には解剖学や外科学がいく分、また一層気落ち気味に行なわれ、テオドリクス、サリセトス、ギド・ド・カウリアコ、ブルヌス、ド・ラルゲラタ、ヨハン・ド・ヴィゴ、ゲルストルフ、ブルンシュヴィーグ、シルハンス、ライフ、ヴェザリウス、アンドレアス・ア・クルーツェ、アルケウス、ファロピウスその他が有名になった。最後に前世紀や今世紀においては解剖術や機械学の完成、さらには疾病を一層よく知ることにより、外科術もまたより高い頂上に登り、そうして時々はよりよい、より有効な道具やより明快な理論やまた一層すぐれた手技を加え、またヨーロッパ各国からの多くの人々、そのうちでも特にイタリア、フランス、ドイツ—これにはオランダ人も属しているが—最後にイギリス人によって完成のほとんど頂上にまで達したようにさえ思える。」

17

右にあげた「大意」と「瘍医新書」中に見られる訳文とをくらべてみると、やはり後者は前者にない言葉を使っていろいろと説明を加えていることがわかる。しかし、ここで、いちじるしく目につくのは、国名・人名などの固有名詞が多く出てくることで、これが「瘍医新書」中にどのように表わされているかは、注意を要するところである。

まず、最初に出てくる Chaldeën と Egyptenaars であるが、原書では住民をさしているのが、訳書では国名となっている。またカルデアを〔葛盧牒空(カルデア)〕、エジプトを〔阨入多(エジプト)〕と、ともに振りがなつきながら大層難解な文字を使っている。

さらに、人名については、アポロは〔空不魯(アプロ)〕、エスキュラピウスは〔噎斯古蠟必烏斯(エスクラピウス)〕、マカオンは〔苜蛤翁(マカオン)〕、ポダ

リリウスは〔卜苔利烏斯〕、シロンは〔西乙籠〕、センタウルスは〔僧苔烏力斯〕等となっている。これ等の用例は大槻玄沢の性癖などを考えあわすと当然と予想されるところで、玄沢独自のものであるように思われる。

なお、それ等のうちの二、三のものについて、玄沢は自ら註を加えて、その博識のほどを披露しているのは、例の如くである。その一例を挙げれば、エスクラピウスの註記に「按彪蒲涅盧・輿地全書ニ今〔厄勒西亜国中〔エピダウリュス〕トイフ地アリ。沙籠湾ニ在ルノ一府ナリ此地ハ医祖〔エスキュラピウス〕ノ生国ニシテ老ヒテ終ヒニココニ卒ス後即チ壮麗ノ廟堂ヲ建テ医道ノ祖神ナリトテ今ニ於ケルモ人々尊崇シテ祭祀ス云々」とあり、ヒュブネル Johan Hubner (1668—1731) の地理書にいわれているところを引用している。

ついでながら、われわれになじみが深い、ヒポクラテス、ガレヌス、アヴイセンナ、ヴェザリウス、ファロピウス等の名が見えているが、それ等は、訳書中に、それぞれ、〔兮卜加蠟得斯〕、〔瓦列奴斯〕、〔空非僧納〕、〔歇力烏斯〕、〔法羅必烏斯〕等と記されていることを附記しておく。

18

「原書」の第八節の記載はつぎの通りである。

8. Onder de nieuwe Schryvers, die 't zy van de gehele Heelkunde, of van derzelver grootste gedeelte hebben geschreven, zyn in de Hoogduitse spraak, zonder van andere te spreeken, de volgende de bekendste, als: *Andr. a Cruce, Paraeus, Tagliacotius, Hollerius, Lanfrancus, Schilhansz, Brunschwieg, Ryff, Agricola, Aquapendens, Hildanus Scultetus, Felix Wurtz, Beverwyk, Overkamp, Barbette, Bontekoe, Jessenius, Joel, Smid, Gelman, Munniks, Musitanus,*

Verbrugge, Gaukens, Schutz, Burger, Norren, Nuck, Horlacher, Van der Stylle, Mayer, Rothe, Horne, Blankard, Leauson, Pradt, Herl, van Solingen, Juncke, Purmann, Muralt, Le Clerc, Cbarriere, Verduc, Dionis, Reisz, Woyt, Palfyn, Stahl en *Juncker.* Inzonderheit aangaande *de Wonden* waardig geleezen te worden *Botallus* van de geschoten Wonden, en *Tassin* Oorlogs-wond-Heelkunst, *Arcaeus, Gelmann, Purmann,* van de geschoten Wonden, *Bellostens* Hospitaal-en Gasthuis-Heelmeester, als ook *Schwartzen* Aanmerkingen over de Wonden. Van *de Hoofdwonden* in 't byzonder, *Schultzens* Verwonden Hoofd, en *Woyt* van de Hoofdwonden. Van de *dodelyke Wonden* zyn in 't Hoogduits te vinden, *Suevus, Pfitzer, Welsch, Amman* in zyn *a* Naauwzistende Heelkunde, *Zitman* in zyn *b* Geregtelyke Heelkunde, nevens *Bauzman, Woyt, Helwig,* en *Kräuterman.* Van de *Verzweringen* of doorgebroken zweeren *Arcoaeus, Purmann, Le Clerc, Verduc.* Van de *Beenbreuken* en Ontwrigtingen, *Le Clerc, Palfyn, Lemery's* Beenheeling, waar in voornamentlyk *Petit* over de gebreken der beenderen wordt gevonden, welk werk zeer goed is. Van de *Ontwrigtingen* in 't byzonder zie *Gruhlman;* van een *c* Winddoorn *Walther. De gereedscbappen tot de Heelkunde* behorende zyn inzonderheit in platen afgebeeld en te zien *Ryff Paraeus, Anderas à Cruce, Aquapendens, Hildanus, Schultetus, Smids.* Beschryvinge van alle tot de Heelkunde behorende Werktuigen, *van Solingen,* en *Dionis.* Van de *Bandagien* zie *Le Clerc, Verduc* en *Bass. Heelkundige Aanmerkingen,* in 't Hoogduits beschreven of vertaald, zyn die van *Hildanus, Scultetus Marebettis, van Meekeren, Roonhuisen, Muralt, Belloste, Purmann, Hutter, Clacius* en *Walther.* Waar toe ook behoren de

a. Medicima Critica

b. Medicina Forensis

c. Spina Ventosa

d. *ColleEtanea Cbirurgica.*

d Heelkundige Verzamelingen, te Hanover gedrukt; insgelyks de Breslause Natuur- en Heelkundige Geschiedenissen. Van de *Breuken* zie *Geiger* en *Horlacher;* van de Vroedmeesters- Kunst, om de Kinderen in's Moeders Lichaam te keeren en te verlossen, *Eucharius Rhodion, Ryff, Pareus, Viardel, Mauriceau, van Solingen, Völter, Huxholtz, Sommer, Muralt, Welschens* Vroedvrouwen-boek, de *Saxische en Brandenburgsch Vroedvrouw, Eckharts* Vroedvrouw, *Stiesser, van Deventer, Dionis, Van Hoorn, de La Motte,* en *St. Amand.* Van de Keiserlyke sneede, *Hildanus, Scultetus, Lankisch, Roonhuisen, Ruleau.* Van het Steensnyden, *Hilddnus, Tolet* en *Wiedeman* en inzonderheit van de nieuwe Engelse manier, *Douglas, Cheselden, Moreand.* Van de gebreken der Oogen zie *Bartisch;* van de gebreken der Oogen en Tanden, *Guillemeau* en *Verbrugge;* van het Kiestrekken, *Croon;* van 't koud vuur, *Hildanus;* van verbrandheit, *Hildanus;* van 't Aderlaten is 'er in 't Hoogduits een byzonder werkie, als mede over't zelve *Jondot* en *Croon;* van 't Aderlaten en Koppen, *Schmid;* van de Etterdagten en Hairsnoeren, *Glandorp, Schorer, Franckens* Berigt der Snoerdragten. Over dat, wat een Heelmeester in de legers diend te weten, zie *Schmid, Tassin, Muralt, Purmans Leger-Heelmeester, en Belloste.* Van 't geen een *Zeevarend Heelmeester* behoord te weten: *Westphaals Scheeps Heelmeester:* 't Geen een Heelmeester in *Pestyd* nodig heeft, *Purmans Pest-Heelmeester:* tot het opmaken van *Heelkundige Berigten,* het boekje, genaamt de Konst om Heelkundige Berigten, of Wondbrieven te vervaardigen. Eene *Heelkundige Apotheek,* of de manier, hoedanig de beste Heelkundige Geneesmiddelen te bereiden, is begreepen in den Gasthuis-

Heelmeester van *Belloste,* en de Heelkunde van *Le Clerc:* alle welke Boeken te zaamen een tamelyke Hoogduitse Heelkundige Boekery uitmaken; van welke alle, en nog andere Heeekundige Schryvers, op zyn plaats in 't byzonder en wydlopiger zal gehandelt worden (F).

日本医史学雑誌第二十四巻三号
昭和五十三年七月三十日発行　昭和五十二年九月十六日受付

宇田川榕菴の著書に見られるガス代謝の記載(II)

矢部一郎

(7) 記載内容の検討

『遠西医方名物考補遺』及び『舎密開宗』における動物のガス代謝についての記載について検討して見る。両書の記述に共通していることは次の様である。

(1) 動物は呼吸により、大気中の酸素をとり込む。
(2) 体内に入った酸素は暗赤色の静脈血に溶けると、鮮紅色の動脈血となる。
(3) 酸素の一部は炭素と結合して炭酸ガスとなり、さらに一部は水素と結合して水となる。これらは呼気によって排出される。
(4) 酸素が欠乏すると動物は窒息する。
(5) 窒息した動物は酸素が供給されれば蘇生する。
(6) 窒素ガスや炭酸ガスは動物の呼吸に有害である。
(7) 窒素ガスは植物には有益である。

『舎密開宗』の動物のガス代謝に関する記述は第三十五章、第三十七章、第四十章、第六十七章、第六十八章、第七十

一章に見られるが、『名物考補遺』の記述はさらに詳細にわたる。このことは『名物考補遺』は医者のための薬物書であり、医者に必要な化学知識を紹介したものであり、『舎密開宗』は純然たる化学書として、他項目との関係もあり、整理して記載されたため、ガス代謝の記事が少ないのであろう。

『名物考補遺』では前述の共通した記事の外に、次の様な記載がある。

(1) 酸素の具体的な生理作用及び酸素過剰な場合の生理作用
(2) 「排気鐘図説」を含めて、『舎密開宗』より詳細に、ガラス鐘による呼吸の実験を説明している。
(3) 魚などの水生動物の呼吸
(4) 呼吸による熱発生
(5) 窒息とは酸素欠乏によるものであり、窒素ガスによるものではないこと
(6) 窒素ガスが過剰な場合の生理作用
(7) 窒素ガスが昆虫に有益なこと
(8) 窒素ガスは呼吸によって摂取されず、体内物質の構成元素である窒素は、呼吸や飲食に由来しないということ
(9) 人間や動物が多い場所での人間の呼吸その他の障害について
(10) 水素ガスの有毒性
(11) 水素ガスによる窒息の原因は、水素ガスの有毒性によるものでなく、酸素欠乏が原因であること
(12) 水素ガスが植物に有益なこと
(13) 炭酸ガス中毒の生理作用

『名物考補遺』の動物の呼吸におけるガス代謝の記述は、『舎密開宗』より詳細ではあるが、さらに新しい知謝を記載したものとはいえない。

西欧では、ブラックの一七五四年における固定空気発見以来、気体化学が発展し、それに併なって、動物の呼吸の研究が進んだ。[12] 一八世紀末、ラヴォアジェにより、呼吸とは、燃焼と本質的には同一のもので、酸化の一形態であり、酸素がとり込まれて、炭酸ガスが生じ、熱を発生するものであり、酸素と炭素との結合により炭酸ガスが出来、酸素と水素との結合により水が出来ると理解される様になった。[13] さらに、ラヴォアジェは、セガンとの実験で、水と炭酸が汗として全身から出ることを一七八一年に示した。[14]

ロウアーは一六六九年に静脈血が硝石精気により動脈血に変ることを発表している。[15] 一七七九年、プリーストリは、暗赤色の静脈血を脱フロギストン空気の中に入れると鮮紅色に変ることを発見し、この現象を血液からのフロギストンの放出として説明した。[16]

その後、ギルタナーが一七九〇年、アッサンフラスが一七九一年に、静脈血が酸素を吸収すると動脈血に変化することを示した。[17] 一七九四年には、モイセスが無酸素状態では動脈血が酸素を放出することを見出し、一七九九年、デーヴィは動脈血を熱すると、酸素と炭酸ガスが放出されることを明らかにした。[18] ついで、一八一八年に、ホームスが、静脈血を熱して、炭酸ガスを遊離させた。[19]

この様に、『植学啓原』、『名物考補遺』、『舎密開宗』などが出版される頃までには、西欧において、動物の呼吸におけるガス交換と熱発生、さらには、血液のガス交換についてかなり明らかとなって来ていた。

今迄の検討から、『名物考補遺』及び『舎密開宗』の動物のガス代謝の記載は、十九世紀はじめ頃までの西欧における動物の呼吸に関する知識を受容したものと考えられる。

(三) 榕菴の著書の参考書からの検討

『植学啓原』及び『菩多尼訶経』には「引用書目」が出ていないが、その他の著作には示されている。

『遠西医方名物考』の「引用書目」は次の如くである。

肖墨盧（ショメール） 初篇	百家工芸諸術韻府書
肖墨盧（ショメール） 後篇	同
淑墨盧（ショメール） 続篇	同
裴斯（ボイス）	同
揭幾斯哥兒（クニーキスコール）	医学校諸科教授集成書
伍乙都（ウヴィフ）増補書	医事纂要書
協乙斯的盧（ヘイステル）	内科治療書
斯微甸（スウィーチン）	同
底電（デーデン）	同
羅仙斯的印（ローセンステイン）	内外科治療書
傑泄兒（ゲッセル）	瘍科集成書
度突乃斯（ドドナエウス）	生殖写真本草集成書
革律失烏斯（コリュシウス）	同
繆模琛倔（ミュンチング）	同
涅乙蘭度（ネイランド）	同
勃郎加盧都（ブランカールッ）	同
物印満（ウエインマン）	同著色書
戻鄧（レイデン）局方	方剤製煉集成書

亜謨斯的爾達謨局方　同
拔太盻亜局方　同
布廉幾　薬性主治集成書
依百乙　同
福烏的　同
遏爾涅満　同

『新訂増補和蘭薬鏡』では「此編引用書ノ符号名物考ト同ジ。故ニ斯ニ贅セズ。唯其遺漏セル者ヲ左ニ挙グ」としている。「引用書目」は次の様である。

馬盧扶涅篤　三才究理学書
萃健　局方製煉集成書
扶歇蘭度　熱病治療経験書
賢度栗仙　治療経験書
貨墨　同
利加兒度　内科治療書
括林　同
紐宛催斯　療術薬剤辨正書
匪勃涅盧　万国地理志
僕麻列　本草書

『遠西医方名物考補遺』には「引用書符号名物考薬鏡ニ遺漏セル者ヲ左ニ挙グ」として、引用書を示している。

依百乙舎密全書
篤隆母斯独爾弗舎密局方
窓篤爾薬性主治書
涅垤爾独乙都局方
泊爾抜烏兒薬性論
葛華戻私経験書
蒲爾母羅垤兒経験書
昆斯蒲律倔内科書
別爾林治療書
呂乙詞物産説
施迄蒲斯治療経験書

『舎密開宗』の「序例」には、次の如き文章がある。

「此書ノ原本ハ諳厄利亜人徳微爾里諳・賢理氏ノ著述ニシテ舎密入門ノ義ヲ以テ其書名トス。独乙蘭土会爾扶尔多府ノ舎密家伊蒲篤隆母斯独尔弗氏其再刻ノ本ニ就テ訂正シ自ラ其按ヲ加テ其邦語ニ訳ス。継テ和蘭ノ医学教頭兼舎密教諭亜独尔布斯依百乙氏更ニ之ヲ訂正シテ又其邦語ニ訳シ一千八百八年文化五年都府亜謨斯的尔達謨ニ刻ス。此篇已ニ三家ノ筆頭ニ成ルトキハ毎巻ノ首メニ其三家ノ名ヲ開スベシ。今簡便ニ従テ之ヲ略シ独リ妄リニ賤名ヲ掲グ。決シテ人ノ功ヲ攘メ己レガ有トスルニハ非ズ。覧者諸ヲ恕セヨ」

榕菴は『舎密開宗』の原本は、イギリスのウィリアム・ヘンリーの『化学入門』の第二版をドイツのトロムスドルフが独訳し、さらにオランダのイペイがオランダ語に重訳して出版したものであると述べている。

榕菴は、さらに、原本の他に、『舎密開宗』で援用した書物を挙げている。

「原書本ト卓然正大意旨淵深ニシテ往々初学ニ在テハ解シ易カラザル者アリ。故ニ釈義ヲ他書ニ採リ或ハ予カ曽テ学ビ親ラ試ル処ニ拠テ愚者ノ一得ヲ述フ。凡ソ各章ノ嵌註及ヒ一格ヲ卑シテ圏シ或ハ按字ヲ冠スル者并ニ附録ハ皆予ガ増註ニ係ル。夫ノ援引スル書ハ即」

榕菴は、イペイの本すなわち『依氏広義』を骨子として、次に掲げる参考書をも用いて、『舎密開宗』を著した。[20]

○葛氏舎密（葛斯的列印著、千七百八十八年刻）○貌氏人身窮理篇（貌律綿抜斯撰、千七百九十一年刻）○布氏明液論（布廉吉撰、千七百九十一年刻）○舎密原本（剌暉西爾著、千八百年刻）○舎密備要（布廉吉述、千八百三年刻）○依氏広義（本篇ノ義ヲ広充スル書、依百乙撰、千八百四年刻）○合薬問答（撰者刻書年数ヲ失フ）○越列機療法（微爾列謨・般・抜爾涅勿爾著、千七百八十五年刻）○三有小学（貌律綿抜斯撰、刻書ノ年ヲ失ス）○薬鋪指南（華健著、同上）○大気修繕法（韃敦莫爾歇爻著、千八百十一年刻）○合薬舎密（篤隆母斯独爾弗著、千八百十五年刻）○舎密翰海（阿屈苔比烏斯、摂牛爾氏撰、千八百十七年刻）○福烏多薬論（般・福烏多著、千八百十七年刻）○理学初歩（伊斯福爾陳孤著、千八百二十年刻）○舎密崖略（費満斯著、千八百二十年刻）○幾那塩説（斯多麗丁孤著、千八百二十二年刻）○測山説（列應宸爾多著、千八百二十二年刻）○紐氏韻府（紐文暉斯著、千八百二十五年刻）○和蘭局方（千八百二十六年刻）○利氏人身窮理篇（利摂蘭度著、千八百二十六年）○蘇氏舎密（蘇馬爾連咎爾孤著、千八百二十七年刻）宸兒多兒薬論（般・宸多児著、千八百二十九年刻）○瓦爾華尼記事（般・列斯輯、千八百三年刻）

『舎密開宗』の援用参考書と『新訂増補和蘭薬鏡』、『遠西医方名物考』及び『同補遺』の引用参考書とで共通するものは次の様である。

(1) 華健著『薬鋪指南』（舎密開宗）・華健局方製煉集成書（薬鏡）

(2) 篤隆母斯独爾弗著『合薬舎密』（舎密開宗）・篤隆母斯独爾弗舎密局方（名物考補遺）

(3) 般・宸多兒著『宸多兒薬論』（舎密開宗）・宸篤爾薬性主治書（名物考補遺）

(4) 般・福烏多著『福烏多薬論』（舎密開宗）・福烏的薬性主治集成書（名物考）

(5) 依百乙撰『依乙広義』（舎密開宗）・依百乙舎密全書（名物考補遺）・依百乙薬性集成書主治（名物考）

(6) 布廉吉撰『布氏明液論』・布廉吉述『舎密備要』（舎密開宗）・布廉機薬性集成書主治（名物考）

(7) 紐文暉斯著『紐氏韻府』（舎密開宗）・紐宛作斯療術薬剤辨正書（薬鏡）

右に挙げた『舎密開宗』の援用参考書で、現在原名のわかっているものは次の通りである。[20]

『薬鋪指南』

K.G. Hagen: Leerboek der Apothekerkunst.

『舎薬舎密』

J.B. Trommsdorff: Leerboek der Artseneimengkundige, Proefondervindelijke Scheikunde.

tr. by N.C. Meppen. 1815.

『蒸多兒薬論』

J.A. van de Water: Beknopt doch zoo veel mogelijk Volledig Handboek voor de Leer der Geneesmiddelen (Materies Medica). 1829.

『福烏多薬論』

H.J. van Houte: Handleiding tot de Materies Medica 1817.

『紐氏韻府』

Buys, Egbert: Nieuw en Volkomen Woordenboek van Konsten en Wetenschappen. 10 vols. 1769～1778.

『依氏広義』

Adolphus Ypey: Sijstematisch Handboek der Beschouwende en Werkdaadige Scheikunde. 9 vols. 1804～1812.

(1)〜(7)まで挙げたもののうち、ニーウェンホイスなどについて不明の点もあるが、大部分は同一のものと考える。

『舎密開宗』内編巻一には、『依氏広義』、『合薬舎密』、『紐氏韻府』、巻二と巻三では『依氏広義』、『合薬舎密』、『明液論』の名が見られる。

ところで、『名物考補遺』巻七元素編第一における元素では「全備ノ精説ハ予カ訳述セル舎密集成」を参考とせよと述べている。『舎密集成』は『舎密開宗』のことであろうといわれている。[20] それ故、『舎密開宗』執筆は『名物考補遺』と併行して進められたと考えられる。このことは『依氏広義』をはじめ数種の蘭書が両書の共通参考書であること、さらには記載内容の共通性からも考えられる。そして、裏を返せば、ガス代謝に関する両書の共通的記述は同じ参考書からのものとも考えられる。

これらのことは『植学啓原』についても言えることである。『舎密開宗』第四十八章と『植学啓原』の「遠近の成分」の記述は一致しており、『植学啓原』巻之三の植物化学関係の項目は『舎密開宗』巻十六、十七、十八の項目に対応している。全般的にどの項目も内容的には『舎密開宗』の方が詳細であるが、内容の程度に差がない様に思われる。

『名物考補遺』の記述の中には、相反する矛盾した事実の記載も見られるが、榕菴が数多くの参考書を利用したことから生じたものであろう。

今後、榕菴のガス代謝の記載と、参考にした蘭書の当該記載との照合検討が必要である。

(四) おわりに

青地林宗の『気海観瀾』文政一〇(一八二七)年には動物の呼吸についての記載がある。[21]

「気の肺に入りて血を清浄にするものは何ぞ。体中の血、原(もと)自ら水質を以て充つ。今吸う所の雰囲の清気、肺に入り則ち水質と交り以て水液を生ず。化して水蒸気となり、之を呼出す。又血中に具有する所の媒質は清気と相会して硬気を生

ず。以て吸ひ、以て呼(は)く。血質更に清浄、黯紫にして復(また)鮮紅、且つ酸質、水質と相和して起る所の温質に由って、以て其血の流動・張拡を進む。是れ生活の呼吸に資する所なり」

文中の「水質」は水素、「清気」は酸素ガス、「硬気」は炭酸ガス、「酸質」は酸素、「温質」はカロリックのことである。この「吸気」の章の外に、ガス代謝の記載は「排気」、「窒気」、「清気」、「燃気」、「水質」、「硬気」の章の中に見られる。植物のガス代謝については、「清気」の章に記述がある。

「然れば草樹の茎葉、太陽の光線を得れば則ち清気を蒸発し、以て其の費耗を償ふに足る。但し草樹は夜に向へば硬気を蒸発す。之を吸ふに宜しからず。是の故に人(ひと)夜中に於て久しく林下に居し、或は寝室多く花缸樹瓶を置くは、皆宜しき所に非ず」

高野長英の『医原枢要』全十二巻は巻一のみ天保三（一八三二）年に出版された。その巻三（未刊本）の「活力作用」に人間の呼吸についての記述がある。(22)

「肺吐二納気息一之器其状如レ嚢其質如二海綿一在二胸腔之正中一一張一縮排二血中之炭質一奪二気中之酸質一或分析或調和以専稀二釈血液一兼起二発身体之温気一」

ここでは呼吸により空気の酸質（酸素）が摂取され、血中の炭質（炭素）が排出されるとしている。

「人ノ吸入スヘキ気ハ独リ生気ノミ一名清気則酸質ノ気ナリ大気ノ呼吸ニ宜シキハ其中ニ此気アル故ナリ然トモ人単ニ此清気ノミヲ吸入スレハ肺質甚タ痿脱シ血液大ニ溶崩スルノ患アリ是ヲ以テ造物主此ニ従テ同カラス且種々ノ物質水気金石気等ヲ云フ也ヲ含有ス故ニ一定シ難シ然トモ概シテ之ヲ則ルニ大気ヲ百分シテ生気ニ十六七分トシ窒気七十二分トシ硬気一二分トス」

人間が呼吸すべきものは酸素ガスのみであるとし、酸素ガスのみでは害があるので、大気には窒気（窒素ガス）と硬気（炭酸ガス）が含まれていると述べ、空気の元素組成を示している。

「是ニ於テ気息ニ入ル所ノ気肺ノ血液ヨリ蒸発スル所ノ炭質気及ヒ水質気ニ和シ相共ニ気管ヨリ射出シ」

酸素と炭素、酸素と水素（水質）の化合を示している。

「肺ニ注流スル所ノ血全身ヲ循環シテ栄養ヲ終ル所ノ残剰ナレハ酸質大ニ欠乏ス故ニ其質粘稠ナリ炭質頗ル多シ故ニ其色紫黒ナリ肺中ニ在テ大気ニ逢ハ分合力ニ由テ其血中夥ク含蓄シテ且ツ固ヨリ好マサル所ノ炭質ヲ分析シテ之ヲ肺中ノ気ニ分配シ其好ム所ノ気中ノ酸気ヲ引キ此ニ合シ其脈管ヲ運行スル間ニ能ク乳糜ニ混和シ是ニ於テ其多キヲ分チ其寡キヲ補ヒ其質再ヒ稀渙シ血ノ酸質ヲ引合シテ稀釈ニナルハ猶灰汁塩ノ気中ノ酸質ヲ引キ此ニ合シ固塊忽チ変シテ粘液ト成カ如シ其色復タ鮮紅ニナリテ活潑氤氳シテ更ニ又身体ノ栄養ヲ為ス事ヲ得ル也故ニ肺ハ血中ノ炭質ヲ排除シ気中ノ酸質ヲ奪却シテ以テ専ラ血液ヲ稀解スルノ要具ト云」

血液のガス代謝と静脈血の動脈血への転換が語られている。

「但シ大気中ノ酸質肺中ニ在テ悉ク血ニ混合スル非ス常ニ残剰アリトス而シテ残余ノ所ハ肺ニ於テ血ヨリ分離スル所ノ炭質ニ交リ合シテ硬気トナリ酸質ヲ失フ所ノ窒気（大気ノ肺ニアル所ノ物ヲ云）ト共ニ呼気トナリ肺ヨリ出ルナリ故ニ人ノ呼気ハ其質沈重シテ焔火ヲ消シ気息ヲ窒スルノ性アリ再ヒ吸入ス可カラス若人再ヒ之ヲ吸入シテ止マサルトキハ眩暈昏冒ヲ発シ重キハ其人遂ニ窒息シテ死ス密室ニ数人会合シ或ハ久シク雑沓熱閙ノ処ニ在ル等ニテ人ノ頭痛眩暈ヲ発スルモ同ク一理ナリ」

呼吸において、酸素と炭素が結合して、炭酸ガスが生じ、窒素ガスと共に呼気となって排出されるが、炭酸ガスのため呼気に毒性があると述べている。

「呼気硬気ノ外ニ又悪息アル水気ヲ含有ス」

呼気には炭酸ガスの他に水素ガス（水気）が含まれているとしている。

「凡ソ万物其性ヲ転シ其質ヲ変スレハ一ハ其形状ノ増発スルノ変ニヨリ熱気ヲ生ス一ハ其交錯摩盪スルノ機ニ因ル火気ノ肺ニ在テ之ヲ発スルモ亦此理ニ由ル細カニ此ヲ論スレハ一ハ気中ノ生気（生気ハ酸質ノ気トナルナリ大気ニ和シ肺ニ入ルノ間ハ其実ハ生気トナリテ存スルナリ）肺ニ於テ血ニ混シ其従来ノ形質ヲ変シテ水トナル（生気本原ノ酸質トナリ肺ノ血中ニ存スル所ノ質ニ交ハリ気状ヲ転シテ水ト成ナリヲ以テ其気トナルトキ含蓄スル所ノ温気分離

孤立シテ之ヲ発シ一ハ酸血ニ混合シ炭質血ヨリ分離ス其摩盪ノ機ニ乗シテ之ヲ発ス而シテ此二様ノ温気合シテ一トナリ肺中ノ諸脈管ニ散蔓シテ之ヲ温メ其余温ハ呼気ト共ニ体外ニ排出飛散スル也是レ呼吸ヲナス者ハ其血常ニ温ニシテ身モ亦熱シ動物ノ肺ナク此機ナキ者ハ魚属等ヲ云フ其冷ナル所以ナリ之ヲ以テ呼吸ハ又人身ノ温気ヲ起発スルノ一妙機ト云フ」

動物の呼吸による熱発生を論じているが、その原因を一つは反応熱、一つは摩擦熱としている。十八世紀、ヘールスやハラー達は体熱の原因を摩擦によるとした。[23]

『植学啓原』、『名物考補遺』、『舎密開宗』刊行以前に、既に、動物のガス代謝については、『気海観瀾』、『医原枢要』などで紹介されていた。しかし、『医原枢要』は植物のガス代謝については触れていない。また、どちらもラヴォアジェの新化学命名法を本格的には採り入れていない。

『気海観瀾』の内容は決して詳細なものではないし、『医原枢要』の内容も人体生理に限られ、内容も榕菴の著作よりやや古い。『医原枢要』の「題言」には「余嘗て西人デラハイエ・ブリューメンバフ・ローセ等の人身解剖窮理の書数部を取て訳稿を起す」とあり、ブルーメンバッハの書は F. van der Berggen 蘭訳の Grondbeginselen der Natuurkunde van den Mensch. door J.F. Blumenbach. 1835 であり、ローゼのものは M.S. Ypma 蘭訳の Handboek der Natuurkunde van den Mensch door T.G.A. Roose. 1809. であろうといわれている。[24]

『名物考補遺』における動物及び植物のガス代謝に関する記載は、西欧の新しい化学概念で、詳細に、記載されていることに注目すべきである。

註

(1) 既に論者は次の様な比較検討をしている。

(a) 『ショメール百科』(『厚生新編』)・『植学啓原』・『植学独語』の関連 『日本医史学雑誌』第二一巻第四号 三一七～三三〇頁 一九七五

(b) 宇田川榕菴と植物分類　『法政大学教養部紀要』第二〇号　一二九～一四九頁　一九七四

(2) 『植学啓原』における植物生理の記載については、既に次の論文で検討した。
『植学啓原』における植物生理　『科学史研究』一〇四号　二一八～二二一頁　一九七二

(3) 『植学啓原』における発酵の記述は、既に次の論文で検討した。
(a) 『植学啓原』に於ける発酵について　『蘭学資料研究会研究報告』第二六〇号　六～十二頁　一九七二
(b) 『植学啓原』に於ける発酵について―補遺―　『蘭学資料研究会研究報告』第二六六号　一～七頁　一九七三

(4) Gabriel and Fogel, Great Experiments in Biology, Maruzen, 1967. の中の N. Th. De Saussure, "On the Influence of Carbonic Acid Gas on Mature Plants", pp. 161～165.

(5) 西欧における植物の栄養代謝の研究史は次のものを参照。
(a) 沼田　真編『近代生物学史』　地人書館　一四四～一五〇頁　一九七二
(b) 中村禎里　『生物学の歴史』　河出書房新社　一三五～一三七頁　一九七三
(c) 鈴木善次　『生物学のあゆみ』　第一法規　七四～九一、一〇六～一〇七頁　一九七〇
(d) アイド　『現代化学史』2　みすず書房　四一九～四二七頁　一九七三

(6) 前出(4)の中の Joseph Priestley, "Observations on Different Kind of Air", pp. 155～157.

(7) 前出(4)の中の John Ingenhousz, "Experiments upon Vegetables", pp. 158～161.

(8) 前出(5)(a)の一四五頁、(b)の一三六頁、(c)の八三～八四頁、(d)の四一九頁

(9) 前出(5)(b)の一三七頁、(c)の一〇七頁

(10) 前出(5)(a)の一四五頁、(b)の一三七頁、(c)の二五二頁、(d)の四二三頁

(11) (a) Julius Sachs, Geschichte der Botanik vom 16. Jahrhundert bis 1860, p. 554 (1875), Johnson Reprint Corporation, New York, 1966.
(b) Martin Möbius, Geschichte der Botanik vom den ersten Anfängen bis zur Gegenwart, p. 270 (1937), Gustav Fischer Verlag, 1968.

(12) 西欧における動物の呼吸研究史については次のものを参照。
(a) 前出(5)(b)の一二九～一三五頁

(b) 前出(5)(d)の四三〇～四三一頁
(c) 中村禎里 『生物学を創った人々』 日本放送出版協会 一三二～一三四頁 一九七四
(d) 原 光雄 『化学を築いた人々』 中央公論社 七五～七六頁 一九七三
(13)(a) ラヴォアジェ、ラプラス 呼吸と動物の熱 『生物学史研究』二五号 三九～四四頁 一九七四
(b) ラヴォアジェ 呼吸された空気が受ける変質 『生物学史研究』二七号 二〇～二六頁 一九七五
(14) 前出(12)(c)の一四〇頁、(d)の七六頁
(15) 中村禎里 ロウアーの生理学 『生物学史研究』二一号 一～六頁 一九七二
(16) 前出(5)(b)の一三三頁
(17) 前出(5)(b)の一三三頁、前出(12)(c)の一四一頁
(18) 前出(5)(b)の一三四頁、前出(12)(c)の一四一頁
(19) 前出(12)(c)の一四一頁
(20) 坂口正男 『舎密開宗』のオリジナルテキストについて 『舎密開宗研究』 講談社 二～二九頁 一九七五
(21) 内山孝一 明治前日本生理学史 『明治前日本医学史』第二巻 二九一頁 一九五五
(22) 前出(21)の二一一頁
(23) 前出(5)(b)の一二九頁、前出(12)(c)の一三三頁
(24) 前出(21)の二一一頁、二二三頁

On the Description of Gas Metabolism in Some Books by Udagawa Yōan

by

Ichiro YABE

The author studied the reception of western knowledge of gas metabolism in some books by Udagawa Yōan. Then, "Botanikakyō" (1822), "Shokugaku-Keigen" (1834), "Ensei-Ihō-Meibutsukō-Hoi" (1834) and "Seimi-Kaisō" (1837-1839) were compared. And it was found that these books contain many similar descriptions on the photosynthesis and plant respiration. The description in "Ensei-Ihō-Meibutsukō-Hoi" is most detailed. The descriptions of fermentation and decomposition were found in "Shokugaku-Keigen" and "Ensei-Ihō-Meibutsukō-Hoi". The descriptions of animal respiration are contained in "Ensei-Ihō-Meibutsukō-Hoi" and "Seimi-Kaisō". The description in "Ensei-Ihō-Meibutsukō" was more detailed.

As "Botanikakyō was a booklet using the special rhythmical scheme of Buddhist sutra recitation, its description of gas metabolism was in concise style. "Shokugaku-Keigen", "Ensei-Ihō-Meibutsukō-Hoi" and "Seimi-Kaisō" may have received early 19th century western knowledge of gas metabolism.

Particularly, it is worthy of our notice that "Ensei-Ihō-Meibutsukō-Hoi" propagated western knowledge of gas metabolism largely in the late Edo era.

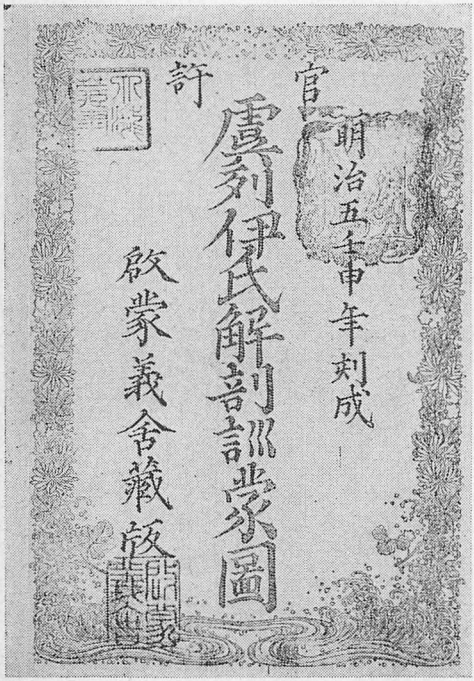
資料

虞列伊氏解剖訓蒙図の洋印

大滝　紀雄

虞列伊氏解剖訓蒙図について、私は昭和五一年七月の日本医史学会例会で講演し、要旨を日本医事新報二七三七号に発表していた。そのさい本書の表紙または扉にM字を型どった松村のイニシャルの洋朱肉印が押されていることを指摘した。これについてはすでに岩治勇一氏が「大野関係医学資料展目録」（昭和五一年）などで発表しておられる。

その後二、三の方からその洋印を示してほしいという要望があったので、私は、ゼロックスや写真をとってその再現を試みたが、原図が四・六×五・二センチの小さいものでどうも分りにく



い。たまたま、当院の梶原知枝子看護婦が拡大模写してくれた図が細部をよく現わしているのでここに掲げておく。

双竜の枠の中に、マツムラのMの字が飾り文字スタイルでみられる。Mの向って左柱は細くて何もないが、右柱は太く、その上三分一に天主を現わす「天」の字がみられる。その下に両手を組み合わせた人形様の像がみられるがこれが「バアデレ」ないし「キリシタン・バテレン」を現わしたものであろう。印としてはなかなかこったもので、キリスト教信者としての松村を現わす興味深いものである。

研究余滴

大槻玄沢の『六物新志』の題言

酒井　シヅ

天明七年（一七八七）頃の出版とみられる『六物新志』の題言七則には、その頃の蘭学の状況や大槻玄沢の経歴が述べてある。『蘭学階梯』『蘭学事始』にもこのことについての記事はあるが、それといくぶん異なる所や未見のこともあるので、ここにその一部を紹介する。（原文は漢文）

題言七則

六物之志　皆翻訳に係る。翻訳の業、全く和蘭学に成る。今世の此書を読む者をして和蘭学起原の梗概を知らしめんと欲する故に題言七則を作る。

一、本邦昇平百有余年治具盡々く張り　文教誕ひに闡け　馨徳広く敷き　淳風光に被る　是に於て朝鮮、琉球海を渉て朝貢し　野作、加剌弗突関を叩て内属し　近くは則ち漢人互市を請て隣交を修し　遠くは則ち和蘭仁沢を慕ふて而して闕下に俯す　此れ実に生民有てより以来未だ治化有らず　是くの如く隆盛なるは有らざる也　而して和蘭の学此時に萠興し　日に進み月に精して其書を執れる者の勝て数ふべからず也（中略）

一、和蘭学之一塗　白石新井先生に草創し　崑陽青木先生に中興し　蘭化前野先生に休明し　鵠斎杉田先生に隆盛す　故に近時事に斯に従ふ者皆四先生に淵源せざるはなし　是を以て其の之を好むや縫掖之徒多きに居り　武弁の輩之に次ぎ　刀圭の流ひ　又これに次ぎ　絵事家と梓人と又其次ぎ也　而して其の好むや其趣き一ならず　儒者は左を天文に祖き　兵家は節を地理に擊ち　医者は心を剖剝に酔はしめ　画匠は精描に流涎し　巧工は擅きを奇器に禀ふ　余以て為らく是れ其好む所は則ち徒らに其小なるものの み　夫の生民の大患疾病より甚しきは莫し　而して和蘭に内外方技の書あり　凡そ萬病の治法具さに備わらざる事なく　精確せざることなし　吾儕終身の業　若し能く訳して以て之を書に述ぶることを得ば　則ち豈に翃たん　天文地理剖剝精描奇器の類のみならんや　利を一世に興して福を萬古に伝ふるべし　是れ乃ち四先生の微意にして　余が之を以て好む所なり　余蘭学階梯を著わし詳かにこれを論ず　此書已に稿を脱す　近日中将に上来せんとす（後略）

日本医史学会例会記事

一月例会　一月二十八日（土）

順天堂大学医学部九号館二番教室

（一月例会は蘭学資料研究会との合同で行われた）

㈠　桑田立斎の蝦夷人種痘事業　小波宏全

㈡　オランダ国歌（補遺）　升本清

二月例会　二月二十五日（土）

慶応義塾大学医学部北里記念図書館第一会議室

㈠　河本文庫―旧ヒルシュベルグ文庫―について　酒井シヅ

現在、東京大学付属総合図書館に収蔵されている河本文庫は大正十四年（一九二五）に河本重次郎から同図書館に寄贈されたものであるが、そのすべてがドイツの眼科学者 Julius Hirschberg の蔵書であることから旧ヒルシュベルグ文庫とも呼称されている。

Julius Hirschberg（一八四三―一九二五）はポツダムに生まれ一八六二年に同地の高等学校を卒業、ベルリンに出て、自活しながら大学医学部の学生となる。一八六六年の夏、北ドイツにコレラが流行したとき、その前にベルリン大学の病理学教室の下級助手をしていた Hirschberg は主任教授でベルリン市の市会議員である R. Virchow から市立第一コレラ病院に派遣された。その後、第二コレラ病院ができて、その院長に Albrecht von Graefe がなり、Graefe は助手の推薦を友人の Virchow に依頼したところ、Hirschberg を指名したので、Hirschberg が第二病院に移ったが、これが彼を眼科医とする運命的な出会いであった。コレラ騒ぎが一段落しようとしたとき Hirschberg は Graefe から秋休み終了後、眼科の助手医に採用することの約束をうけ、約束通り眼科の助手医となった。

一八六八年、開業医師の資格をとり、翌年開業。一八七〇年に Private Dozent となり、一八七九年にベルリン大学の A.O. 客員教授、一九〇〇年に正教授となり、一九〇九年に定年退職するまでその職にあった。

退職後は眼科史の執筆に専念し、Graefe-Saemisch の眼科全書の眼科史を書き上げている。これは現在でもその右に出るものがないと評価されているものであるが、この眼科史を書くことは Hirschberg が若いころから留意していたことであった。そのために必要な文献を集め、一八九二年には文献収集のために世界旅行をして資料を集めている。この旅行では日本にもきて、二ヵ月滞在した。このときの旅行記をのちに "Um die Erde" と題して出版した。その中の "日本の部" を一九二三年に小川剣三郎が記し、小川の主宰する "実験眼科雑誌" に三年間にわたって連載した。ちょうど、その頃、Hirschberg の Collection を河本が買う契約が成立していたのである。

Hirschberg の来日したのは明治二五年（一八九二）であり、日本の医学がドイツ医学を模範として近代化をはじめ、わずか二一年しかたっていなかった。そのときの様子を Hirschberg の旅

行記への日本におけるドイツという意をみると次のように述べている。

「唯一艘の船にも出会はずして、太平洋上の二週間の航海をなして始めて日本帝国の地を踏みたるドイツの医師たる余は一種の仙境にあるが如き思ひをなせり。即ち万事は異様に奇妙なりしも其の特性は非常に愛嬌に富み愉快なるものなりき。殊に余を愉快に思はしめ且つ驚かしたるは北米大陸を越え、太平洋を航したる間に稀れに聞くことを得たる国語が直ちに余の耳に入りたることなり。ドイツ語は日本の医師の好むところなり。

彼らは先ずドイツ人より新医学の福音を聴きたるなり。彼らは東亜的研究心の形式をもって、この新医学を解釈したり。ドイツの諸教授は東京帝国大学に在職したり、又其の内の一部は今尚ほ在勤す。是等諸教授の後継者たる日本人並に同僚等は皆ドイツ語を話し、未来の医科大学生は既に高等学校に於てドイツ語を学ぶ、またドイツに留学してその研究を全ふするを得たる者は其の同僚より多幸なりと賞讃せらる。多数の陸軍軍医監はドイツ語を解す。海軍軍医のみは英語を好むの風あり。また赤十字の病院において助手として養成する軍人にもドイツの初等読本は教えられる。」

という文章にはじまって、Hirschberg は遠い極東の地に初めて訪れたドイツの大学教授ということで、各地で、驚くほど尊敬と親愛に充ちた歓迎に出会った様子を述べている。そして、Hirschberg の一挙一動が新聞に報道されることに驚き、そのことは同じ船で来日したアメリカ人の嫉視を招いたという。

このとき日本で受けた印象が非常によかったことから、自分の蔵書を日本に譲ることを決意したということである。

ところで、Hirschberg の蔵書は、一九〇一年に出版された蔵書目録からわかるように非常に膨大な量で、質的にもすぐれたものであった。この目録の序文によると、それはすでに三〇年以上もかけて集めたものであり、将来、眼科学、光学ならびに治療の歴史を書くための予備的行為として目録の編纂をしたのであって、蔵書はいずれベルリン医学会に寄贈するとある。つまり、この目録を編纂した時点では日本に売り渡すつもりは毛頭もなかった。それが第一次世界大戦後のマルクの暴落したときに心が変わり、大正一〇年(一九二一)、東京帝国大学の眼科学教授河本重次郎に十二月二日付の葉書で自分の蔵書を四万円で売りたいと言ってきた。その封書には売渡しの条件として、蔵書は火災と地震に耐えられる場所に置くことをあげ、支払いは四年の年賦でよいということであった。あまりにも高額であるために河本は石原忍、中村辰之助といった主な弟子を集めて相談したところ、弟子たちはぜひ買うようにとすすめたので、河本夫人の快諾を得れば買うということになった。夫人は快諾を与え、大正十一年(一九二二)に売買契約が結ばれた。そして、四年年賦が終った段階で品物を引渡すことになったが、その間に円の下落があり、ポンド立てで支払うようにといってきたために、結局は二千円ほど高くなった。おまけに最後の代金を送ったのが大正十四年(一九二五)一月であったため、代金がつく前に Hirschberg が亡くなり、事情が変ったために、蔵書を引き渡すのにひともんちゃくがあった。

蔵書の引き渡しは日本側は丸善、ドイツはデーリー会社が交渉し、Hirschberg 側は家族がいないためにハーゼという人が代理人となり河本の側は留学中でのちに熊本大学の眼科学教授になった鹿児島茂が立会って行なわれたが、その梱包代や送料に約七千円かかった。従って約五万円をかけて購入することになったがすべて河本の私費で支払われた。

荷物が日本につくと、梱包もとかないまま東京大学の総合図書館に寄贈された。幸いなことにそれは関東大震災の後であったが、もし河本が Hirschberg と契約した大正十一年にこの文庫が東大に入っていれば、関東大震災のとき、他の貴重な多くの書物と同様に灰燼に帰していた。荷物は、それから長い間、図書館の地下室に箱に入ったまま置かれていた。

昭和十一年（一九三六）、河本重次郎の喜寿祝賀会が深川の清澄公園で開かれたが、このときまでに文庫の十分の一ぐらいしか整理されていなかった。そこで、その席上、文庫整理を河本先生喜寿祝賀会の記念事業としようということになり、出席者が基金を出し合って千二百円余り集め、図書館に持っていったところ、整理費として六千円を必要とし、二年はかかるということであった。そのために、再び河本から、必要な分を出して貰って整理が始まった。さきの千二百円では Hirschberg の蔵書目録を復刻し、関係方面に配ったのである。この復刻版の序文を石原忍が記しているが、これによると、昭和五年（一九三〇）に来日したフライブルグ大学の眼科学の教授 Theodor Axenfeld は Hirschberg 文庫が東大にあることを知って大いに驚き、「ドイツでは彼の文庫がどこに行ったのであろうかと疑問になっていたのであるが、それが日本に来ていたのは幸せである。アメリカへ行かなくてよかった。もし借りたい本があったら、ドイツまで貸出して貰へるだろうか」という話がでたという。

東大総合図書館での同文庫の整理は昭和十四年（一九三九）に二年余りの歳月を費して終わり、同年十月に新たに編纂された河本文庫目録（旧ヒルシュベルグ文庫）がガリ版刷の四冊本で出版された。そこで東大に所蔵される Hirschberg の旧蔵書の全容が明らかになったのだが、別冊などを十数部をまとめて整本したものが多いために、冊数では一五八六冊であるが、部数にすると二万部を越えるものである。しかし、この数字からもわかるように、その大半が別刷であり、旧 Hirschberg 蔵書目録にある古代、中世の貴重な文献は全く見当らない。河本が Hirschberg と契約を結ぶ前に、女婿である東大の病理学教授三田村篤志郎がドイツで Hirschberg に会って文庫を見たが、このとき、Hirschberg は、三田村に眼科以外の文献二五〇種あまりは除くことを申し渡したという。はっきり言って、Hirschberg 文庫の価値はそれらのものがあってこそ、広く学者の心を把るものになると思う。

しかし、眼科史にかかわる文献に関してはこれだけの Collection はここ以外にはどこにもないものであろう。とくに日本のように一八七〇年代以前の雑誌が入手しにくいところにあっては、別刷といえども貴重なものであり、河本重次郎の英断に感謝しなければならない。

なお、東大で貴重書扱いをしてあるのは

Porta G.D. della, Joan Baptista Neap. Cerefraction Optices parte. Libri Nouem. Napoli 1593

B.R. von Langenbeck の自筆本の二つである。また、眼科関係の本も目録にあるものでも目ぼしいものはなく、目録にない別刷集が沢山入っている。それが Hirschberg の意志によるものか、彼が亡くなったためにその後を受けた代理人がやったものか解らないが、充分、古書の価値を見究めるだけの力をもっていない素人を相手にして、だましたような売買に河本のためにも口惜しい気がする。同時に Hirschberg 文庫の残部が何処にあるのか知りたいものである。

(二) 史学と医学の接点二例—典薬寮と伊賀氏事件—　奥富敬之

四月例会　四月二十二日（土）
慶応義塾大学医学部第一校舎講堂

(一) 浅田宗伯の書供覧　大滝紀雄
(二) 永富独嘯庵について　堀江健也

五月例会　五月二十七日（土）
順天堂大学医学部九号館一番教室

(一) 駿東病院のことなど　芹沢武男
(二) 韓国金斗鍾博士の漢方解剖学の研究について　矢数道明

六月例会　六月十七日（土）
順天堂大学医学部九号館一番教室

(一) 華岡青洲門人中村逸斎肖像画—高橋由一・明治一五年作—紹介　末中哲夫
(二) 「静海上府懐日記」について　戸塚武比古

山陰医史学研究会

日　時　昭和五三年一月二十七日（金）
会　場　島根医科大学三一番講堂
午後二時～四時三〇分

プログラム

（シンポジウム）
＜山陰の医史学を考える＞
司　会　中尾　鑛（島根医大・経済学）
話題提供
(1) 松尾久朗（島根県温泉津町）：明治初期の医家が用いた生薬について—わが祖父の処方より—　（二〇分）
(2) 森　納（鳥取県国府町）：「察病亀鑑」の訳著、青木浩斉について　（二〇分）
(3) 中村和成（島根医大・解剖学）：山陰における医学発達史の再見手法　（二〇分）
まとめ……米田正治（島根医大・医史学）　（二〇分）

日本医史学会関西支部春季大会

とき　五月二十一日（日）午前十時より
ところ　大阪市南区牟田病院
研究発表
(一) 森下薫博士をしのぶ　藤野恒三郎（阪　大）
(二) ハーヴェイとハンター　栗本　宗治（大阪医大）
(三) 奈良西大寺薬―豊心丹（ホーシンタン）―について　宗田　一（阪　大）
(四) 医倫理史研究の必要、世界医倫理誌の大要　三木　栄（堺）
(五) 医の倫理処方「六根解毎法」について　―福井藩浅野塾の倫理鉄則―　岩治　勇一（大　野）
(六) 江戸時代和製顕微鏡二台供覧　杉立　義一（京　都）
(七) 江馬蘭斎の人生観について　青木　一郎（岐　阜　県）
(八) 中国古辞書に見える歯科病名　―説文・康熙字典について―　杉本　茂春（大阪歯大）
(九) 渡辺孝恭―（京都の儒医町医師）　山田　重正（京　都）
(十) 華岡塾（大坂）の慣行　末中　哲夫（近畿大学）
(十一) 再び緒方郁蔵と独笑軒塾について　古西　義麿（大　阪）
(十二) 橋本（綱常）文庫について　竹内　真一（福　井）
(十三) E・ベルツ著『内科病論』について　安井　広（愛知県）

雑　報

日本学術会議第七五回総会報告

交通ストで延期されていた第七五回総会は、五月十六日～十八日までの三日間、日本学術会議講堂で開かれた。この総会の主目的は、今期の活動計画案を審議し、各種委員会等の構成を行うことであった。

総会第一日目にまず、沖縄からオブザーバーとして参加された琉球大学山里榮昭、田港朝昭両教授が紹介された。次いで会長から前総会以後の経過報告が次の五項目について行われた：(1)前会長からの引継事項、(2)国内主要事項、(3)国際学術交流、(4)要望・声明等、(5)その他。続いて科学技術会議関係報告および日本学術振興会小委員会報告が行われた。

次に名取副会長から、財務委員会報告として、昭和五三年度国際会議代表派遣旅費および委員等旅費の配分について報告があった。また、岡倉副会長から広報委員会報告があり、その中で学術会議の広報活動を強化する一環として報道機関論説委員等との懇談会を開いたことが述べられた。次いで勧告小委員会報告、UNCSTD 小委員会報告が行われた。

引き続いて部会報告に移り、各部長から新設研連に対する部会意見等についての補足説明があった。また研究費、国際学術交流および資源・エネルギー問題の各臨時委員会報告があった。

午後の議事は第十一期活動計画委員会報告から始められた。会

長の概括説明の後、要綱、課題および研連各分科会について各委員長から補足説明があった。法規分科会は本総会への提案に代えて、諸問題に関する分科会の見解を報告書として提出したが、これについて三宅義夫委員長から詳細な説明があった。この報告書については、今後改革検討小委員会等が引き継ぎ、これに基づく方策等を検討することを確認した。

続いて「活動要綱」の審議に入った。池田末利・要綱分科会委員長から前文、活動の基本姿勢、重点目標、および審議・運営の基本的態度の四項目について要点の説明があった後質疑に入った。種々の観点から会員の意見が述べられたが、審議・運営の基本的態度に論議が集中した。今期における勧告等のあり方、政府および国会との対応について原案に盛られた考え方が質された。活発な討論の後、会長から原案の文言のうち必要個所は運営審議会で修正する条件で採決に入りたいとの提案があり、採決の結果賛成多数で「活動要綱」が採択され第一日目の議事を終えた。

総会第二日目の議事は「課題および各種委員会」の審議から始められた。渡辺洋三・課題分科会委員長から課題と要綱との対応並びに各種委員会の運営および任務・構成に関する特記事項の説明があり、質疑に入った。本提案は具体的な活動内容を示しているだけに、多面的な論議が行われた。特記事項に関しては、(1)委員会の審議を期中に完結しようとする今期の基本方針とそれを受けた委員会運営に関する表現、および(2)今期新設された資料担当委員の任務と性格について議論が集中した。特に(2)については修正案が提案され、賛否ほぼ同数となったが、これについて提案者が別途原案を修正し了承された。ここで一旦常置委員会関係を部分採決し、賛成多数を得て午前の審議を終えた。

午後の審議では特別委員会関係に入ったが、特に研究公務員特例法の取扱いについて二～三の会員から意見開陳があった。この問題は前期に集中審議を行い、また、関係者の要請も強いが、問題を前進させる現実的な方途は多々あり、慎重に対処すべきだとの趣旨であった。ここで特別委員会関係を部分採決し、賛成多数を得た。次いで運営審議会付置小委員会の審議に入り、部分採決して賛成多数を得た後、本提案全体について採決を行いほぼ満場一致で可決された。

続いて「研連の組織・運営」の審議に入った。今道友則・研連分科会委員長から詳細な説明があり、質疑応答の後採決に入り、賛成多数で本提案を採択し、総会二日目の議事を終えた。

午後三時からは各部会が開かれ、各種委員会委員の選出が行われた。

第三日目には、午前十時から午後三時にかけて各常置委員会、特別委員会等の初会合が行われ、委員長・幹事の選出並びに活動方針の審議が行われた。

午後三時から総会が開かれ、前日審議された諸提案の一部文書修正の結果が報告された。

また、次の総会を十月二十五日（水）～二十七日（金）の三日間とすることを決めた。最後に、沖縄県在住の科学者を代表して田港朝昭氏から本総会への招へいに対する謝辞と今後の協力要請をこめた挨拶があり、総会を終了した。（日本学術会議広報委員会）

【書　評】

米田正治著「続島根県医家列伝」

米田正治博士が「島根県医家列伝」（昭和四十七年）、「島根県医学史覚書」（昭和五十一年）についで「続島根県医家列伝」を松江文庫から出版された。矢つぎばやのヒット作第三号である。

ひもといて最初に心ひかれたのが、天下の奇人「天愚孔平」なる人物論である。「月照寺の大亀」といわれる出雲天隆公の頌徳碑が写真で紹介されているので、かねて大亀に関心を抱いていた私は、医の歴史と月照寺の石亀が一体どんな関係にあるのかと、大いに興味がわいたのである。かつて木幡吹月先生から松平宗衍（むねのぶ）公が歴代藩主中の偉大なプレーボーイであることを教示されたのであるが、天愚孔平は藩侯に仕えた医師であって、彼の撰文によって、大石亀の上に宗衍公の事績が刻まれたことを、この本から教えられて、夜毎に月照寺の蓮池を泳ぎ廻った大亀が、松江藩の医の歴史とつながっていることもわかった。

この本は、古今医人伝と名医家列伝の二編から構成されているが、メインというべき第一編には天愚孔平のほかに、錦織玄秀（大森銀山の井戸代官を診療）、土江自仙（狂犬病の治療）、飯塚文庵、錦織周泉（ともに西洋医学の推進者）、佐々木文蔚（島根県医学校初代校長）、秦佐八郎（サルバルサンの創製）、藤原薫（結核予防会の創設）、高橋昌造（高橋吸虫の発見）などに加えて、「石見人森林太郎として死せん……」と遺言した文豪・森鷗外の医師としての業績をたたえ、明治末期の頃、当時の難病であった脚気の原因究明に努力する鷗外の真摯な姿が紹介されている。

右のほかに、石原喜久太郎、辻寛治、中田瑞穂、野津辰郎など、郷土出身者で医学界に大きく貢献されたドクターたちの業績が精緻（せいち）に紹介されているが、著者はこれらの人たちが、「日本の医学界はもちろんのこと、世界的にも著名な方々であるにもかかわらず、関係市町村史にさえ記録されていないことを残念に思って」丹念に資料を整理してまとめられた労作である。米田先生のこのような地道な努力こそ、日本の医史学の水準を高めて行く原動力となるであろう。

第二編は名医家列伝で、前著につづいて島根県下の九医家をとり上げて、各医家が父祖の代から地域医療に果した役割を視点としてまとめられているが、この編は今後とも継続して執筆されることをお願いしたい。

島根医科大学では「医学とは何か」、を究明する医学概論（深瀬学長担当）が開講されているが、この学問には医史学が重要な分野として位置づけされているので、米田先生は講師として本学の医学概論を分担されている。

多忙な医業の寸暇をさいて新しい学問である医史学の体系化に努力しておられる先生に深い敬意をささげるとともに、島根県の医学や医療の発展に関心をもたれる方々に、この名著を推奨する次第である。（松江市中原町、報光社発行、B6判、二三三ページ、一、三〇〇円）

中尾　鐡

水原秋桜子の「産論」句碑建立

杉立義一

産論の月光雲をはらひけり　秋桜子

六月四日、賀川玄悦の眠る玉樹寺境内（壬生川通五条上る一筋目東へ五〇メートルの地）に建立、除幕された水原秋桜子の句碑は、折からの小雨にしっとりと濡れてその姿をみせた。

この句碑建立の由来を簡単にのべると、昨年九月二五日に行われた賀川玄悦没後二百年記念顕彰碑除幕式のさい、列席の丸山正先生（埼玉県岩槻市、日本産婦人科学会名誉会員）からの「先日ドイツに遊び、ビーティッヒハイム市にあるベルツ先生の生家の前に建てられた秋桜子の〝君によりて日本医学の花ひらく〟という句碑を見て感銘をうけた。賀川玄悦の業績は世界に冠たるものであり、幸い秋桜子先生は東大産婦人科教室で五年先輩にあたるから、玄悦の業績をたたえる俳句を作っていただくようにお願いしたい」というお話が発端となったのである。

今回の俳句は、玄悦の著書『子玄子産論』四巻を、当時の医界の暗雲をはらいのけた月光に比した、句作の苦心のあとが感じられる句である。

秋桜子先生のせっかくの労作を無にしてはいけないので、関東で丸山正先生、関西では南部捨治先生が発起人代表として、俳句同好の医師に呼びかけて浄財をつのった。石は玄悦の郷里・彦根の近くを流れる愛知川の青色を探してきた。筆者は俳句は門外漢であるため、南部先生や秋桜子の高弟である三嶋隆英先生（左京）らのご意見をきいて字の配置などに苦心した。山科渡辺石屋に刻字させたが、水成岩のため硬くて苦心したようである。据付けは山科草木造園が行い、五月八日大安の日に完成した。

幾何学的な二百年記念碑の向い側に、野趣のある自然石青石の句碑が建って、玄悦の墓域は一段と光彩を増した。序幕は玄悦の末孫にあたる賀川友美子さんが行い、山田一夫顕彰会長をはじめ東京、大阪、地元の有志二十数人の参列者は、ひき続きお寺で昼食を共にして懇談、玄悦の遺徳をしのんだ。なお、この日出席された南部、白井両先生から次の句が寄せられた。

先哲に句碑建つ佳き日のみどり雨　南部青鳩

産論の句碑建つ寺の若葉雨　白井せい一

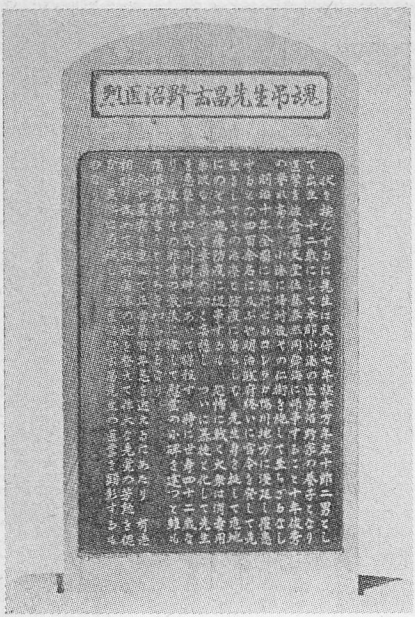
（本文は「京都医報」第八七二号に所載した杉立義一先生の文を抜萃しました。）

沼野玄昌没後百年弔魂碑建立

蔵方宏昌

明治十年（一八七七）コレラ大流行の折、安房鴨川町でコレラの防疫活動と治療に献身努力していた医師沼野玄昌は、鴨川町民に惨殺された。昨年はその百年忌に当った。

去る六月十日、この沼野玄昌百年忌追悼法要と「烈医沼野玄昌先生弔魂碑」の除幕式が行われた。千葉県鴨川市貝渚字汐留の汐留公園にあるこの碑は、鴨川市、天津小湊町、安房医師会、長狭郡部医師会等が中心に、壱百万円余の費用を募って建てられた。



碑の前面には、沼野玄昌の非業の死を伝え、次のように刻まれている。

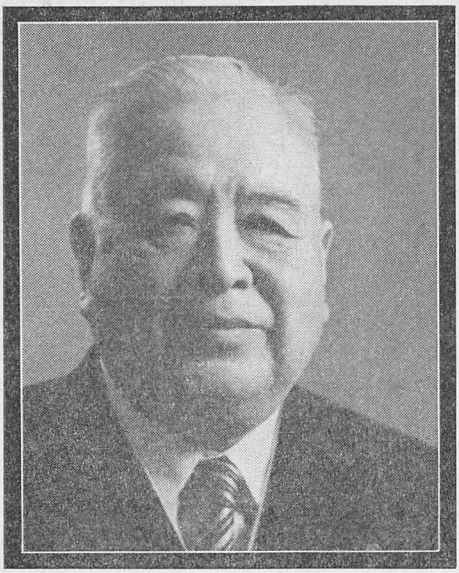
状を按んずるに先生は天保七年旗本万年左十郎二男として出生　十二歳にして本郡小湊の医家沼野家の養子となり医学を佐倉順天堂佐藤泰然同舜海に師事すること十年俊秀の誉れ高く小湊に帰村後その仁術を施して至らざるなし　明治十年全国に流行せるコレラが鴨川地方に漫延し罹患するもの四百余名に及ぶや明治政府終いに官令を発して先生をしてその治療と防疫に当らしむ　先生身を挺して危地にのぞみ施療防疫に従事するも恐怖に戦く大衆は消毒用薬液も反って毒薬の如く妄想し　ついに暴徒と化して先生を急襲し加茂川河畔において謀殺す　時に世寿四十二歳なり　後年その非業の最後に涙して慰霊の小碑を建つと雖も痛恨哀惜言うところを知らざるなり　今や星霜を重ねて正当第百年忌を迎えるにあたり　有志相計り改めて此所痛恨の地を整えて偉大な先覚の芳勲を偲び　至心に弔魂して烈医沼野玄昌先生の医業を顕彰するものなり

碑の後面には、小湊誕生寺六十一世日良上人から沼野家に贈られた（明治十一年）詩「身従政令投前厚　医学精忠跡尚存　心地温衣深雨日　妙経一巻酬霊魂」が彫られている。

なお、汐留公園の一隅に「沼野魂はや七とせの冬の月曇りもはれてここに成仏」と刻まれた住民建立の「玄昌七回忌供養碑」があり、天津小湊町妙蓮寺には玄昌の墓碑がある。

訃報

本年一月二十日、本学会評議員中泉行正先生は肺炎で亡くなられた。享年八十一歳。告別式は一月三十日青山斎場で行なわれ、本学会を代表して、小川理事長が左記の弔辞を捧げた。



弔辞

日本医史学会評議員中泉行正先生が去る一月廿日御逝去になりましたことは私ども会員一同にとり悲嘆と痛惜の極みであります。先生は医学の歴史特に眼科史の御造詣が甚だ深く、私どもは多大の御薫陶を受けました。先生は人格高邁、いつも温顔をもって私どもに接して下さいました。

先生の医史学における御業績を顧みまするとと、日本学士院の委嘱により書かれた「明治前日本眼科学史」、雑誌「銀海」に連載された「古医書をたずねて」が特に大切でありその他にも貴重な論著をいくつか発表されましたが、昨年御発表の「石原式色盲表の製作過程」は少くとも私に深烈な印象を与えました。

中泉先生は早くから古医書の蒐集に勉めて財団法人研医会図書館をつくり、一般の研究者に実に惜みなく見せて下さった。

私どもは研医会図書目録をひもといて、目的の書名をみつけると、その瞬間にもう大丈夫だ。見せて頂けると喜んだのであります。敗戦後数年たって本学会も立ち直りをみたとき、中泉先生の御厚意で月例会の何回かを研究会を会場にして開きました。そのときも貴重な古医書を見せて頂き、仏教の経典もいくつか拝見したことを記憶しています。

いま全国の会員数が漸増して約六百人となった日本医史学会を代表して中泉行正先生の御長逝を哀心哀悼し、御冥福を祈る次第であります。

昭和五十三年一月三十日

日本医史学会理事長　小　川　鼎　三

日本医史学会会則抄

第一条　この会は、日本医史学会（Japan Society of Medical History）という。

第二条　この会は、事務所を〒113東京都文京区本郷二―一―一順天堂大学医学部医史学研究室内におく。

第三条　この会は、医史を研究しその普及をはかるを目的とする。

第四条　前条の目的を達成するために次の事業を行う。

(1)　学術集会、その他講演会、学術展観の開催等

(2)　機関紙「日本医史学雑誌」「日本医史学会々報」および関係図書等の刊行。

(3)　日本の医史学界を代表して内外成の関連学術団体等に機関との連携

(4)　その他前条の目的を達するために必要な事業

第五条　この会の会員は次のとおりとする。

(1)　正会員

この会の目的に賛同し会費年額五、〇〇〇円を納める者ただし、外国居住者は年額30ドルとする。

(2)　名誉会員

この会に対し功績顕著であった者で評議員会の議決ならびに総会の承認を得た者。

(3)　賛助会員

この会の目的事業に賛助し会費年額一〇、〇〇〇円以上を納める者、または団体。

第六条　正会員になろうとするものは評議員の紹介により、理事長の承認を得て入会金二、〇〇〇円およびその年度の会費を添えて所定の入会申込書を提出しなければならない。

第七条　名誉会員は次の各号の何れかに該当し理事会、評議員会が功績顕著と認めた者であることを要する。

(1)　三十年以上の在籍正会員であって七十歳に達した者。

(2)　前理事長。

(3)正会員または外国人で功績顕著な者。

名誉会員は終身として会費を免除することができる。

第八条　賛助会員になろうとする者も第六条に準ずる。

第九条　第六条及び第八条の会員の資格取得は会費納入日より始まる。

第十条　会員には次の権利がある。

(1)　この会の発行する機関誌の無償配布をうけること。

(2)　機関誌に投稿すること。

(3)　総会、学術大会、学術集会その他の事業に参加すること。

第十一条　会員は、会費を前納し総会の議決を尊重しなければならない。

第十二条　会員は次の事由によってその資格を失う。

(1)　退会

(2)　会費の滞納が一年以上を経過したとき。

(3)　禁治産、準禁治産または破産の宣告。

(4)　死亡、失踪宣告または会員である団体の解散。

(5) 第十四条による除名処分。

この会は学術大会を毎年一回開催し、学術集会は随時開催する。

第十三条　この会には、年一回学術大会を主宰するために会長を一名おく。

2　会長は、理事会の推薦により、通常総会毎に理事長が委嘱する。

3　会長の主宰する学術大会は、この会の通常総会と同時点で開催することを原則とするがやむを得ない事情のある場合は評議員会または総会の承認を得て変更することができる。

4　会長の任期は、学術大会を議決した通常総会の翌日から次の学術大会を終了するときまでとする。

5　会長は必要に応じ理事会に出席しこれと密接な連絡のものとに計上予算を勘案して企画運営する。

6　会長に事故あるとき、または欠けたときは新に会長を委嘱するまで理事長がその職務を代行する。

7　会長は、学術大会関係事務を委嘱するために、会員のうちから学会委員若干名を選任することができる。

8　学術集会は、随時理事長主宰のもとに開くことができる。

『日本医史学雑誌』投稿規定

発行期日　年四回（一月、四月、七月、十月）末日とする。

投稿資格　原則として本会々員に限る。

原稿形式　原稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の表題、著者名のつぎに欧文表題、ローマ字著者名を記し、本文の終りに欧文抄録を添えること。

原稿は二百字または四百字詰原稿用紙に縦書きのこと。

原稿の取捨選択、掲載順序の決定は編集委員が行なう。また編集の都合により加除補正することもある。

著者負担　表題、著者名、本文（表、図等を除く）で五印刷ページ（四百字原稿用紙で大体十二枚）までは無料とし、それを超えた分は実費を著者の負担とする。但し欧文原著においては三印刷ページまでを無料とする。図表の製版代は実費を徴収する。

校　正　原著については初校を著者校正とし、二校以後は編集部にて行なう。

別　刷　別刷希望者には五十部単位で実費にて作成する。

原稿送り先　東京都文京区本郷二丁目一の一、順天堂大学医学部医史学研究室内　日本医史学会

編集委員　大鳥蘭三郎、大塚恭男、蔵方宏昌、酒井シヅ、樋口誠太郎、三輪卓爾、室賀昭三、矢部一郎、矢数圭堂

編集顧問　小川鼎三、A・W・ピーターソン

事務担当　鈴木滋子

日本医史学会役員氏名（五十音順）

理事長　小川　鼎三
会長　大鳥蘭三郎
副会長　大塚　恭男
常任理事　大鳥蘭三郎　大塚　恭男
　　宗田　一
会計監事　大滝　紀雄　古川　明
理事　石原　明　大塚　恭男　大鳥蘭三郎
　　大矢　全節　緒方　富雄　小川　鼎三
　　蒲原　宏　酒井　シヅ　酒井　恒
　　佐藤　美実　鈴木　勝　宗田　一
　　中野　操　長門谷洋治　藤野恒三郎
　　三木　栄　矢数　道明　谷津　三雄
　　山形　敞一
幹事　蔵方　宏昌　酒井　シヅ　杉田　暉道
　　谷津　三雄　矢部　一郎
評議員　青木　一郎　安芸　基雄　阿知波五郎
　　石原　力　今市　正義　岩治　勇一
　　内田　醇　江川　義雄　大滝　紀雄
　　岡田　博　片桐　一男　川島　恂二
　　久志本常孝　榊原悠紀田郎　杉田　暉道
　　鈴木　正夫　鈴木　宜民　関根　正雄
　　瀬戸　俊一　高木圭二郎　高瀬　武平
　　高山　坦三　竹内　真一　田代　逸郎
　　田中　助一　津田　進三　筒井　正弘
　　大塚　敬節　王丸　勇　杉　靖三郎
　　三廼　俊一　吉岡　博人　和田　正系
　　土屋　重朗　中川　米造　中沢　修
　　中西　啓　中山　沃　服部　敏良
　　樋口誠太郎　福島　義一　堀江　健也
　　富士川英郎　古川　明　本間　邦則
　　丸山　博　松木　明知　三浦　豊彦
　　三輪　卓爾　山下　喜明　山田　光胤
　　安井　広　矢部　一郎　山中　太木
　　米田　正治
（理事の名は省略）
名誉会員　赤松　金芳　石川　光昭　大塚　敬節
　　王丸　勇　杉　靖三郎　三廼　俊一
　　吉岡　博人　和田　正系

編集後記

七九回日本医史学会総会は去る三月、宮崎で盛会のうちに終了しました。前号は総会号で抄録集となった関係で、原稿が沢山あつまり、暑さの中で校正を終り、後記を書いております。

皆様の御協力で本誌も内容が充実し、誠によろこばしいことと存じます。

今年は異常天候で、水不足が伝えられる昨今で、猛暑が続いております。

先輩諸先生の御指導で編集委員の末席に名を連らねさせていただいておりますが、今後とも皆様の御指導、御協力でさらに立派な雑誌ができますように、微力ながら御手伝いをさせていただきたく思っております。

よろしい御願い申し上げます。

（KY）

昭和五十三年七月二十五日　印刷
昭和五十三年七月三十日　発行
日本医史学雑誌
第二十四巻　三号
編集者代表　大鳥蘭三郎
発行者　日本医史学会
〒一一三　東京都文京区本郷二―一―一
代表　小川鼎三
順天堂大学医学部
医史学研究室内
振替　東京六―一五二五〇番
製作協力者　金原出版株式会社
日本医学文化保存会
〒一一三　東京都文京区湯島二―三―一四
印刷所　三報社印刷株式会社
〒一三六　東京都江東区亀戸

明治前 **日本医学史** 日本学士院編 増訂再版

日本古医学資料センター刊
出版科学総合研究所印刷製作
三百部限定　A5版上製　全五巻　五八、〇〇〇円

再刊にあたり、誤字脱字を訂正すると共に、あらたに全五巻の総目次及び人名索引・事項索引を各巻に附した。

※第三巻及び第五巻を分売致します。
各冊定価一一、〇〇〇円　各、五十部限り頒布。

明治前 **日本薬物学史** 日本学士院編 増訂再版

日本古医学資料センター刊
出版科学総合研究所印刷製作
三百部限定　A5版上製　全二巻　一八、〇〇〇円

中国医書本草考 岡西為人著

A4版上製　一九、八〇〇円

朝鮮医書誌 増修版 三木栄著

A4版上製　一八、〇〇〇円

日本医学史 決定版 富士川游著

附「京都大学蔵富士川本目録」合冊
A5版上製　一三、〇〇〇円
A5版総革特製　一八、〇〇〇円

西洋医学史 決定版 小川政修著

覆刻版　再刊にあたり、事項索引・人名索引を横書きに改めると共に、仮名書き人名の次に原欧文人名を補して利用に便ならしめた。
（九月下旬刊）　A5版上製　一三、〇〇〇円

重輯新修本草 決定版 岡西為人著

附「新修本草復原に関する考察」
二百五十部限定　朱墨二色刷
A4版上製　八、八〇〇円

正倉院薬物 朝比奈泰彦 編修

A4版上製　八、〇〇〇円

〔総発売元〕 **井上書店**
〒一一三　東京都文京区本郷六丁目二番八号
電話（〇三）八二一-四三四（代表）　振替東京八-五三一九

※いずれも一般の書店の棚には並んでおりません。
直接弊店に御注文下さい（送料不要）

昭和３年～昭和19年

日本医史学雑誌 全18冊

昭和３年～15年 旧称、中外医事新報

日本医史学会編 明治時代、富士川游によって開拓され基礎が据えられた日本の医史学は、その後組織的な調査研究が要請されるようになり、昭和初頭日本医史学会が創設される。その研究発表の中心となった機関誌「中外医事新報」のちの「日本医史学雑誌」をここに復刻。富士川游をはじめとしてシーボルト研究で名高い呉秀三、あるいは若きころの三枝博音の翻訳などと豪華な顔ぶれ、テーマは日本から西洋・中国・アラビアにも及んで話題豊富なこと、さらに史伝を多くかかげていることなど注目される。日本医史学の研究、さらにはひろく日本科学史研究の必須資料である。

■研究者の便を考え、最終配本時に昭和３年から昭和52年までの索引を刊行。
■復刻の今日的意義をより考え、各巻月報を付す。
■菊判、合本全18冊、各巻頁500～670頁、上製本クロース装
■**第１回配本中**（以降毎月１回配本）
■**各巻平均定価８，０００円**

箕作阮甫の研究 蘭学資料研究会編

■Ａ５判・７００頁／**定価1,3，０００円**

医学・地理・歴史・兵学・地質・物理・天文・法律・語学と多方面にわたり、阮甫の残した先見性に富んだかずかずの業績を、それぞれの分野の専門家が詳しくさぐり、新しい視点で再評価したものである。

日本医学史名著シリーズ

呉氏医聖堂叢書
呉　秀三編／**定価 7,500円**

杏林叢書 全２巻
富士川游他編／**定価10,000円**

華岡青洲先生及其外科
呉秀三著・宗田一補訂／**定価 6,500円**

泌尿器科学史 全１冊
大矢全節著／**定価 9,500円**

増補 日本医事大年表
中野　操著／**定価 8,000円**

日本眼科学史
小川剣三郎著／**定価 3,300円**

日本産科叢書
呉　秀三著／**定価 9,000円**

人蔘史
今村　鞆著／**定価55,000円**

箕作阮甫
呉　秀三著／**定価 5,500円**

よはい草 全６巻
小林商店広告部編／**定価12,000円**

思文閣出版 〒606・京都市左京区田中関田町2-7・075(751)1781(代)振替京都26228
〒101・東京都千代田区三崎町２-20・ 03(263)6349(代)

最新刊

生理学史の古典的名著，翻訳完成！

生理学の黎明 —16・17・18世紀—

Lectures on the History of Physiology During the Sixteenth, Seventeenth and Eighteenth Centuries (1901年刊)

Sir Michael Foster 著

西丸和義(広島女学院大学教授)監訳／小野紀美子(放射線影響研究所)訳

A5判　292頁　¥4,000 〒200

■監訳者の序より

イギリス現代生理学の開拓者フォスターの門下からは生理学のみならず植物学，動物学，物理学，生化学，病理学，哲学への有能な貢献者を出した．このことはフォスターの研究への心がその門下を導いたのによるのであろう．

フォスターは黎明期の先進たちの歩いた道を求めることによって，この心を得たのではあるまいか．そうしたものがこの著書の中からよくくみとることができる．研究への哲学と生活への心構えがいかにその学問の発展に重要であるかがこれによってもわかる．研究による結果は次々と改変していくが，この研究への心は不変であるようである．……

このフォスターの生理学の歴史を通読することによって，いつとはなしに研究者はいかにあるべきかをおのずから教えられるので，真に得がたい名著であると思われる．

■跋—本書の和訳を記念して——内山孝一

ここにSir Michael Fosterの生理学史の講義が和訳されたことは，わが国の現在および将来の生理学の発達にとって時を得たものであることを喜びたい．フォスター教授は現代におけるイギリス生理学の開拓者である．

この本は生きている，そして私どもに迫るものがある．……

フォスターの生理学史の重要性をわが国の若い生理学者が認識し，先覚者の伝統のうえに新しい創造を成し遂げることを期待し，希望する．生理学史は医学史の一部であるが，広く考えれば，人類によって創造された文化史の一部である．その意味からも，医学に携わる多くの人々はいうまでもなく，世界の文化，日本の文化の発展に少しでも寄与しようとする多くの人々により，本書が愛読されることを期待する．文化は人間だけにより創造され，無限に発展するものだからである．

●主な目次

ベザリウス－その先覚者と後継者
近代医学の黎明期における社会と学界／ベザリウスの出現とその足跡／サーベタスと小循環の発見

ハーベイと血液循環－乳び管とリンパ管
コロンブスと小循環／カエサルピヌスの大循環への考察／ファブリシウスによる静脈弁の発見／ハーベイによる血液循環の概念／アセリによる乳び管の発見／ハーベイの研究の意義

ボレリと新しい物理学の影響
医学における物理学の導入／デカルトとその思考／ボレリの筋収縮に関する業績とその人柄

マルピギーと腺および組織の生理学
顕微鏡の出現と組織学／マルピギーの業績とその生涯／毛細血管と血球の発見／腺と分泌器官の研究

バン・ヘルモントと化学的生理学の勃興
錬金術とパラケルサス／バン・ヘルモントによる化学の医学への導入

シルビウスの弟子たち，17世紀における消化の生理
シルビウスによる医化学派の確立／シルビウスの弟子としてのステンセンとド・グラーフ／スタールによる消化生理の概念

17世紀のイギリス学派－呼吸の生理
ボイルの呼吸生理への貢献／フック，ロウワーの出現／メイヨウの生涯と呼吸生理への貢献

18世紀における消化の生理
ブアハーベの出現／ハルラーのエレメンタの出版と現代生理学への黎明／レオミュールの消化生理実験法／スパランツァニーの消化生理への貢献

呼吸に関する近代学説の勃興－ブラック，プリーストリーおよびラボワジエ
ハルラーまでの呼吸の概念／ブラックによる炭酸ガス発見への道／プリーストリーの生涯と酸素発見へ／ラボワジエの酸素発見とその生涯

神経系統についての古い教理
ベザリウスのもっていた概念／デカルトの神経系への論説／ウイリスの神経系の研究／グリソンの被刺激性の概念／ハルラーの神経生理学のまとめ

医歯薬出版株式会社　本社〒113 東京都文京区本郷3-7-10 ☎03(944)3131(大代)　関西出張所 大阪市北区西天満4-11-23 高電ビル ☎06(364)6541

直接郵送ご希望の場合は現金書留か振替東京8-44012で，送料加算の前金にて当社発行図書
通信販売店の郵便東京メール・サービスへ〈〒170 東京都豊島区巣鴨4-23-5 ☎03(949)4617〉

コレソルビンは、動脈硬化との関連が強く、頻度も高い高脂質血症のⅡ型、Ⅲ型、Ⅳ型に対して強力な血清コレステロール、血清トリグリセライド低下作用を示します。
また原体は結晶性の粉末、無味・無臭――服用しやすいカプセルと細粒です。

【適応症】 次の諸症に伴う高脂血症の改善　動脈硬化症，脳動脈硬化症，冠動脈硬化症，高血圧症，糖尿病　【用法・用量】カプセル剤：通常1日3～6カプセル（シンフィブラート0.75～1.5g）を3回に分けて食後投与する．なお，年齢・症状により適宜増減する．細粒剤：通常1日1.5～3.0g（シンフィブラート0.75～1.5g）を3回に分けて食後投与する．なお，年齢・症状により適宜増減する．【使用上の注意】(1)一般的注意　類似化合物（クロフィブラート）の長期大量投与による動物実験で，催腫瘍性が認められたとの報告があるので，食事療法又は他の療法では効果不十分な場合にのみ適用を考慮すること．(情報内容についてはその他の項を参照)　(2)次の患者には慎重に投与すること　肝・腎障害およびその既往歴のある患者　(3)副作用　1)血液　類似化合物（クロフィブラート）の投与によりときに白血球数の変動および白血球減少症が認められ，またまれに無顆粒球症があらわれることが報告されている．2)肝臓　ときに肝機能検査値の上昇（血清トランスアミナーゼ値，乳酸デヒドロゲナーゼ値の上昇等）が認められることがある．また，類似化合物（クロフィブラート）の投与によりまれに黄疸，またときに肝肥大があらわれることが報告されている．3)筋肉　類似化合物（クロフィブラート）の投与によりときに血清クレアチンホスホキナーゼ値の上昇，また筋肉痛があらわれるとの報告があるので，このような症状があらわれた場合には減量又は休薬を行うこと．4)中枢神経系　まれにめまいがあらわれることがある．5)皮膚　ときに発疹等の症状があらわれることがある．6)胃腸　ときに悪心，食欲不振，腹部膨満感，下痢等の症状があらわれることがある．7)その他　類似化合物（クロフィブラート）の投与によりときに不整脈，性欲減退，胆石がまたまれに脱毛が報告されている．(4)相互作用　1)経口抗凝血剤の作用の増強があらわれるので，併用する場合には，プロトロンビン時間を測定して，抗凝血剤の量を調節し，慎重に投与すること．2)経口血糖降下剤の作用の増強があらわれるので，経口血糖降下剤と併用する場合には，血糖値を測定し，慎重に投与すること．(5)妊婦，授乳婦に対する注意　類似化合物（クロフィブラート）の投与により胎児ならびに母乳中への移行が報告されているので，妊婦または妊娠している可能性のある婦人，授乳中の婦人に対する投与は避けること．(6)その他　類似化合物（クロフィブラート）をラット及びマウスに長期間臨床用量の10倍量（300mg/kg）投与したところ対照群に比較して肝腫瘍の発生が有意に増加したとの報告がある．〔注意〕細粒剤は特殊被膜を施してあるため，調剤時強く混和すると，被膜が破れる恐れがある，従って調剤時強く混和しないこと．〔貯法〕1)室温保存　2)湿気をさけて貯えること（細粒剤のみ）．

脂質代謝改善剤

コレソルビン カプセル 細粒

〈シンフィブラート〉

〈健保適用〉

吉富製薬株式会社
大阪市東区平野町3丁目35番地

804-B9

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japan Society of Medical History

Vol. 24. No. 3 July 1978

CONTENTS

Articles

Medical Ethics and the Essence of Medicine ……Sakae MIKI…(209)

Chūtaku Sasaki; his Role Relating to Venesection……Shoichi YAMAGATA…(214)

Nicolaas Tulp (I)……Akira FURUKAWA…(224)

The Myths of Kojiki and Nihon-shoki, and Medicine (Part 1)……Taku SIMMURA…(236)

On Doko Izashiki, Japanese Pioneer of Anesthesia at the End of 17th century ……Akitomo MATSUKI…(246)

A Study of the Yōishinsho (4) ……Ranzaburo OTORI…(252)

On the Description of Gas Metabolism in Some Books by Udagawa Yōan (2)……Ichiro YABE…(258)

Materials ……(273)

Miscellaneous ……(280)

The Japan Society of Medical History
Department of Medical History
Juntendo University, School of Medicine
Hongo 2-1-1, Bunkyo-Ku, Tokyo